

41496

教科書文庫

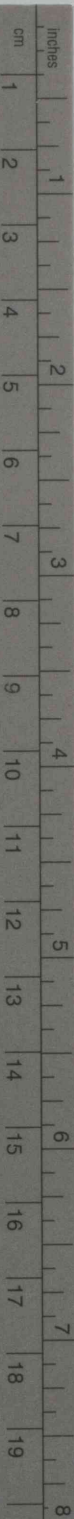
f
810
1938 41-1928
20000 65467

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

4a
810
BB13

國語讀本

新改
版訂

卷四



資料室

濟定檢省部文

用科文漢語國校學中・日六廿月二年三十和昭
用科語國校學業實・日六廿月二年三十和昭

4a
810
冊13

國語讀本 卷四



文學博士

上田 萬年
榮田 猛猪
鹽野 新次郎

編 共

改訂新版

國語讀本卷四

目次

一 旅人の富士	小島烏水	一
二 小さな旅人	薄田泣菫	八
三 秋風 (詩)	正富汪洋	二六
四 趣味の巖島	五十嵐力	二四
五 小園の記	正岡子規	二九
六 俳句評釋	河東碧梧桐	三三
七 言葉の變遷	佐々醒雪	四四
八 當になる人	徳富蘇峰	四九

九 樂訓

貝原益軒 五

一 わが家の富

徳富蘆花 三

二 蜜柑船と輦臺渡し

石井 滿 六

三 平安京

藤岡作太郎 七

四 紋所の話

沼田頼輔 八

五 大石良雄

山路愛山 九

薩南の美風

田中白茅 一〇

六 討入の模様を報ず

榎本其角 一六

七 寒稽古

中川霞城 二〇

八 御民われ (和歌)

二七

九 浅草紙

吉村冬彦 三三

一〇 藤樹書院

橘 南 谿 三〇

一一 滋賀の山越

村井弦齋 三四

一二 漢字の構成

一五

一三 進學

室 鳩 巢 一五

一四 道話二篇

柴田鳩翁 一三

一 南京の壺

一三

二 談義僧

一六

三 孔子とその徒

安藤圓秀 一七

四 春は動く

長塚 節 一八

三 土の歡喜 (詩)

河井 醉茗 一九二

三 南洲遺訓

西郷 隆盛 一五二

目次 終

國語讀本卷四

一 旅人の富士

小島 烏水

曉の空に大宮表口の裾野原は、うす紙をはがすやうに目
 がさめる。ほとゝぎすが頻りに鳴く。富士のさばいた裳
 裾が斜がちな大原に引く境目に、光といはんには弱いほど
 の、一線の薄明りが横さまにさす。正面を向いた富士は、平
 べつたくなつて、塔形にすわりがいゝ。たゞ、劍ヶ峰の頂の
 みが、槍のやうに際立つてとががつて見える。雲は野火の煙

小島烏水

名は久太。高松の
人。横濱正金銀行
員。紀行家。文藝
家。

大宮

静岡縣(駿河)富士
郡。富士裾野の西
端。

擬人法

劍ヶ峰

富士頂上の最高
峯。

一 旅人の富士

一

富士のさばいた裳裾が斜がちな大原に引く境目に、光といはんには弱いほどの、一線の薄明りが横さまにさす。正面を向いた富士は、平べつたくなつて、塔形にすわりがいゝ。たゞ、劍ヶ峰の頂のみが、槍のやうに際立つてとががつて見える。雲は野火の煙

擬鐘草



擬寶珠



木楡



松虫草



の低迷する如く、富士の胴中を幅ひろに斜斷して、残んの月の淡い空に、龍卷してゐる。うぐひすの鳴く音も交る。武藏野に見るやうな黒土を踏んで、うら若い檜の植林が一塊りに寄り添つてゐる。私達の足許には釣鐘草、萩、擬寶珠、木楡が咲く。瑠璃色の松虫草と、大原の水分を一杯に吸込んで脹らんだやうな桔梗の蕾からは、秋が立ちそめてゐる。秋の野になくてかなはぬ芒と女郎花は、うら盆のお精靈に捧げられるために、生れて來たやうに、涙もろくひよりりと立つてゐる。

仰げば朝焼で、一天が燃えてゐる。夕焼のやうに混濁した朱でなくて、聖くて朗らかな火である。富士の斜面のひ

だは均整せられて、端然たる中にも、その高いところは光を

強く受けて、浮彫に上り、低い裂け目には暗い影が漂つてゐる。

全體としては、素焼の陶器の雅味である。

富士が小さく見えるのもこれだ。

表裏に廻り、左右

から見直しても、あなたも

同じ姿の八字の輪廓と、圓錐の形式とは、連嶺構造の山と、銳利に切

込まれた深谷とを見た目からは、

浅いものに見えるかも知れぬ。

だがそれは、大裾野を忘れ



あなたもなにも富士の山同じ姿に見ゆるかなあなたも面もこなた面も

(右衛門督僧都)

スナ(カマエ) スナ(カマエ) スナ(カマエ)

愛鷹
駿東・富士の兩郡
に跨る。富士山の
東南麓。

てゐるからだ。裾野は富士のものだ。富士のものを富士に返して、東海の濱までひき下り、^{さして}仰いで見たまへ。それから數十里の裾野を、^{かま}曲馬の馬が、同じ圓周を駆けめぐると面に廻つて見たまへ。それこそ富士といふ彫刻品の線だらう。或は一步さかのぼつて、裾野がいまだ生成しないうち、富士と、愛鷹と、箱根とが、^{陥没}陥没地帯の大海原に、火山島のやうに煙を吐いて浮んでゐたところを想像すれば、今日の豆南諸島の大島、利島、三宅島などが、^{鋪石}鋪石のやうに大洋に置かれてゐると似て、更に大規模なる山海の布置を構成するであらう。今のやうな裾野となつて、富士の登山が

アンデス
南米の南端より西
岸に沿ひパナマ地
峡に連互する山
脈。

アンデス
の山脈
が
パナマ
地峡
に
沿ひ
西
南
米
の
南
端
より
西
岸
に
連
互
す
る
山
脈
に
似
て

ほ悦ばれるのは、^{絨氈}絨氈を布く緑青の草と、^{濕分}濕分を放散する豊かな潤葉樹林とにあらう。

旅人がアンデスの登山を悦ぶのは、麓が永久の春であるからださうだが、山の天國は、^{發達}發達した裾野を有するところの富士火山帯に多くあらねばならない。それから山の全裸體像として、線や、光や、影や、圓味やを研究するのに、富士ぐらゐ秘密を許してくれる山はあるまい。縦横はもとより、富士ばかりは恐らく螺旋狀にでも上れよう。結局富士は、探検家の山でなくて、女でも、子供でも、老人でも、心易く登れる全人類の山だ。殊に旅人の山だ。私も旅人として富士を讚美する。

天地のわかれし時や

神さびて高くたそひ

駿河なるまほしの高

山嶺は天の糸のつりて

見れば海の日みかけも

かろひ照る月の光も

見えぬ白雲もつかり

ひびかり時、いづれ

山部赤人

歌人。聖武天皇時

代の人。

たひつてやむる山部

左のゆは。

時知らぬ

時知らぬ山は富士

の根いつとてかか

のこまだらに雪の

ふるらん(在原業

平)

在原業平

歌人。阿保親王の

第五子。世に在五

中將と稱せられ

る。元慶四年(五

〇政、年五十六。

西行

歌僧。俗名佐藤義

清。鳥羽上皇に仕

へた北面の武士で

あつたが後出家し

た。諸國を行脚し

た。建久元年(元

〇政、年七十三。



富士を仰ぐ業平

なく、旅人であつた如くに、富士山もさうであつた。天地のわかれし時ゆ、神さびてと歌つた山部赤人は旅人であつた。太刀持つ童馬の口取り、仕丁どもを召連れ、馬上袖をからんで、時知らぬ山は富士の根と詠じた情熱の詩人在原業平も、流竄の途中に富士を見たのであつた。墨染の衣を着た

六



富士見西行

坊さんが、綱代笠を片手に杖ついて、富士に向つて休息してゐるとすれば、問はずして富士見西行なることを知る。富士くらゐ大詩人を持つた山が、地球上のどこに存在してゐるだらう。名もない一遊子ではあるけれど、私も幼いときから富士の影を浴びて、武藏相模で育つた一兒童として、永い間の外國生活から、故國へ放還された一旅人として、親友と、子供と、忠實なる案内者にと、今富士の膝下へ来て、色き母の顔に見えまつるが如く、しみぐと見てゐるの

ビードロ
ポルトガル語。硝子。

薄田泣菫
名は淳介。岡山縣の人。詩人。隨筆家。

だ。

今にも大野原の上を、自由に飛翔しようとする大鳥が、羽翼を收めて、暫く休息してゐる姿勢を、富士は取つてゐる。空氣は其の頬一杯に吹いてビードロの様に、薄青い光を含んで流動してゐる。そして野も、山も、森も、朝の光線にひたつて、——あゝ光ほど不思議な現象液はあるまい。幻からはつきりと物體のつかめる現實の世界となつた。

(氷河と萬年雪の山)

二 小さな旅人

薄田泣菫

私達が七つ八つの頃には、そろそろ秋が更けて來ると、晴れきつた空を毎日のやうに雁が渡つた。私達はそれを見

かけると、吹きさらしの野路に立つて、空の一方を振り仰ぎながら、

雁よ、棹になれ。

棹になつたなら、鈎になれ。

と、その長い行列が次第に雲の中ににじみこんでしまふまで、聲を囁らして叫んだものだ。が、いつの間にか雁も少なくなつて、今では晝間その長い列が空を渡ることには、よくよく人氣遠い野原かどこかでないと、滅多に見られなくなつた。

そのころは又うしろの岡に行つて見ると、葉の落ちかゝつた雑木林に小鳥が澤山來てゐたものだ。小鳥といふと、



雁

百舌



私は海などを越えて来る彼の小さな旅人のあわたしい旅を考へて、いつも言はうやうのない淋しい旅心地を覺える。

まづ百舌が来る。秋の彼岸が過ぎてそろ／＼日影が黄色がかつて来ようといふ頃、私たちはどうかすると暖い日の午過、そこらの木立で甲高い鋭いその聲を聞く事がある。「あゝ、もう秋だな」と思はず振返つて見ると、矮小な櫟にまじつて、ずばぬけて丈の高い楡の木に百舌が一羽止つて、黄色い夕陽を受けて、羽が金のやうにきら／＼してゐる。私たちはその瞬間、言はうやうのない強い健かな氣持が胸に流れるのを覺える。

ひたき



次には鶉ひたきが来る。山家の午過、だるさうな蟋蟀の聲もいつの間にか止んで、枯葉一つ寝返を打つ音までがはつきりと耳に入る静けさの底に、どこやら窶れた人の溜息とでもいつたやうな微かな聲が洩れて来て、何の音ともわからな

い。すると、樹蔭の葦畑かどこかで、餘念なくせつせと仕事に精出してゐた農夫が、ひよいと顔を擧げる拍子に、すぐ鼻先の小枝から、枯葉のやうな小鳥がついと身をそらして逃げていつてしまふ。それが鶉だ。

鶉といつたら、まるで悲哀を抱いてゐる人のやうに、大抵は連に離れてたゞ獨りて出て来る。そしてそこらの小枝に止るなり、何か眼に見えぬ昔馴染でも招くやうに、ひよく

四十雀



りひよくりと軽い御辭儀をして、さゝやくやうな聲でうたひ出す。私はそれを見ると、他のため、世の中のためといったやうなわけでなく、自分一人の爲にうたつて、それで満足してゐる人たちを思ひ出さずにはゐられない。

鶉が來てもものゝ十日も経たぬ間に四十雀が來る。この鳥は鶉と違つて十羽も二十羽も群をなして來る。山から里へ移る折などには、まるで時雨でもするやうに、細かい羽音がさつと空を掠めて聞える。そしてそこらの木立におりるなり、めまぐるしいほどすばしこく、雀のたごなどを啄きまはしながら、鼠色の背をそらし、柔かみのある圓い胸を見せて、銀の鈴をふるやうな透き通つた聲で早口にしやべ

みそととい



り續ける。で、かうした大層な群の中には、きつとまだ羽の伸びきらない、灰色の産毛そのまゝの雛兒が交つてゐて、どうかすると高い枝に止り損ねて、もんどり打つて宙に返ることもあるが、そこは又慣れたもので、いきなりひよいと下枝につかまつて、大層な身振りのませた身振で樹肌のひびを啄いたりする。まるで山家育ちのすばしこい、ささくささくな魂そのものを見るやうな氣持がする。

小雪がちらつく頃になると、鶉が來る。これは鶉と同じやうに大抵獨法師で、それもこつそりと附近を忍ぶやうにして來る。冬の初の午過、山近い田舎の小家で、爺は炬燵に潜り込んで、こくりくと居睡をする。その側で婆さん

頬白



はせつせと絲車を繰つてゐる。檐に吊した干菜の影が煤けた障子に見すばらしく映つて、時折ちつぽけな小鳥の影がちらついたりする。どうかして絲目が切れて、睡さうな錘の音がぼつたり止むと、こそくと掛菜をむしる音がする。が、老人の耳にそんな音の聴取れよう筈がない。婆さんは俯いたまゝ、また絲を紡ぎにかゝる。さうかうする間に、鳥は舌打をするやうな聲を立てながら、ひよいくと小刻みに籬を傳つて、隣から隣へと狭苦しい物蔭を出たり入つたりして移つて行くのだ。それが鷓鴣である。

鷓鴣と後先になつて頬白が来る。冷たい雨のびしよびしよと降る中を、獨者の頬白が灰色の胸までぐしよぬれに

鶉



鶉(シギ)



なつて、しよんぼりとそこらの木に止つてゐるのを見ると、私の國でこの鳥の啼聲を解いて、

一筆啓上つかまつる。

子供泣かすな、火の用心。

今度の便に金十兩。

やりたいけれど、一文も御座なく候。

と言ひ傳へてゐるのを思ひ出して、しみくと世渡のむづかしさと、旅心の寂しさを思はずにはゐられない。

うしろの雑木林にこんな小鳥が来る頃になると、野にはもうそろそろ鶉が來、鶉が來る。(畿内行脚)

正富汪洋
名は由太郎。岡山
縣の人。詩人。

三 秋 風

正 富 汪 洋

空高く、そゝりたつ古城へと、

草靡け、山を越え、河わたり、

秋の風吹く、秋の風ふく。

鬣をふるふ馬、河舟に

持上ぐる網の目の白き水、

吹かるゝよ、ふかるゝよ。

岸ぞひの粟畑、芋畑、

江の上を飛びわたる雀二羽、

吹かるゝよ、ふかるゝよ。

山寺の銀杏の樹、石段に、

海を見て、落葉掃く尼の頸、

吹かるゝよ、ふかるゝよ。

はたくと白き帆や、舟の中、

飛び跳る、小魚らの口の内、

吹かるらし、ふかるらし。

青海波
雅樂の曲。もと天
竺樂。波の模様を
つけた服を着て舞
ふ。

こゝろよき 青海波、樂人の

磯馴松、和して打つ岩鼓、

吹かるらし、ふかるらし。

旅人が杖もちて、記したる

砂の文字、さし上ぐる蟹剪刀、

吹かるらし、ふかるらし。

行く人の、とだえたる橋の上

過ぎて往く野鼠の口ひげを、

風の吹く、かぜのふく。

繁り立つ眞菰草、ざわくと、

人の無き舟はたに、影織れと、

風の吹く、かぜのふく。

少女らが、菱の實の、殻除りて、

古池につまみ喰ふ指さきを、

風の吹く、かぜのふく。

刀豆なたまめの揺らく竹、其の下の

土の上、仰向けに鳴く蟬を

風なぶる、風弄る。

女郎花、揺らるゝに、美しき
袖ひろげ、飛ばんかの蜻蛉を、

風弄る、風なぶる。

小徑來て裾にある草の實を、
拂へども、落ちざるに、下ぐる鬢、

風弄る、風なぶる。

水減りて崖高く凹みたる

河岸の黒色の濕り土、

風流る、風ながる。

藪かげの幾日も、動かざる
米搗きの水車、その羽に、

風流る、かぜながる。

川べりの宿屋の灯、寂しげに、
瞬きて、水遠き橋板に、

風うたふ、風唱ふ。



こまじぬ



りんだう

村社、高麗犬の前肢に、
みたらしの手拭に、玉垣に、
風唱ふ、風うたふ。

樅の樹に、蘆の穂に、蓼の穂に、
栗殻に、龍膽りんとくに、蕎麥莖に、
風うたふ、風唱ふ。

相觸るゝ兵器かと怪しめと、
月の夜、ひとつ家の木戸の錠、
風鳴らす、かぜ鳴らす。

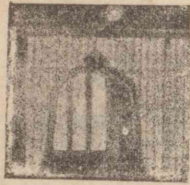
星と月、高く照り、雁飛べば、
五位啼けば、藤の實を、大杉を、
風鳴らす、かぜ鳴らす。

月一つ、荒海をすゝむさま、
夢にみるうた人の瓦燈窓、
風鳴らす、かぜ鳴らす。

旅人の肌に入り、ふるさとの
爐を圍む同胞を想へよと
秋の風吹く、あきの風吹く。
(詩と隨筆集)



五位鶯



瓦燈窓

五十嵐力
山形縣の人。國文學者。早稻田大學教授。文學博士。

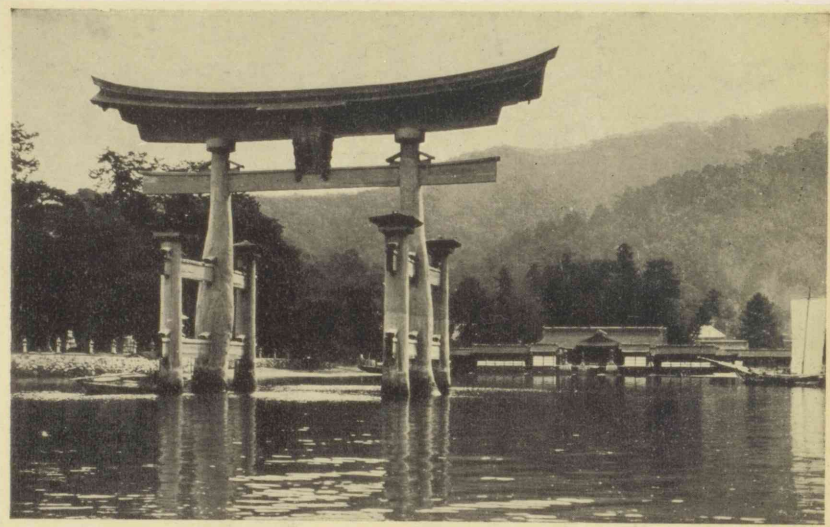
彌山
島中の最高峰。標高四五五米。

市村島姫
田心姫
湊津姫

四 趣味の巖島(官幣中社) 五十嵐 力

趣味の眼から見た巖島の中心の味ひは何處にあるかといへば、吾等は第一に彌山を背景として立つた低い美しい社殿を、あの大鳥居のあたりから眺めたところにあると思ふ。

先づ藝州本土の對岸から船を僦(備カ)うて、ぎ(作見)い(カ)くと櫓の音面白く漕ぎ出でる。青一色で塗りつぶした様な恰好のよい島だ、と思ひながら漕いでゆくと、その一色の中から、違つた色彩の社殿や堂塔やが、次第に著しく浮出て来る。初には木片を立てたやうに見えた鳥居が、段々と大きさを加へ

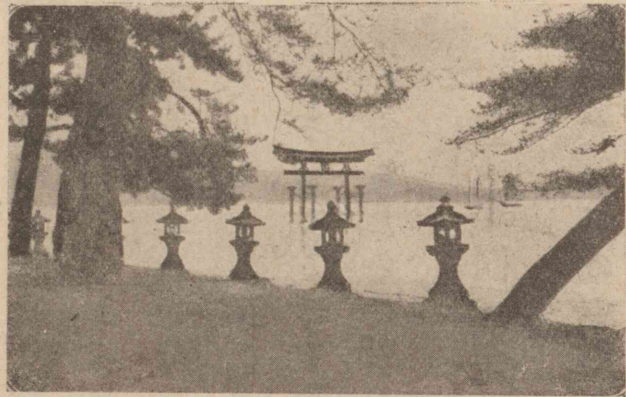


— 社 神 島 巖 —

て来る。また漕ぐ程に、鳥居も社殿堂塔も、益、大きさ鮮かさを加へて来る。その中に次第に進んで大鳥居の下に来ると、吾等は覺えず驚きの目を見張るであらう。見よ、目の前には、高さ八間五尺、棟の長さ十二間五尺の、天地の甲乙地軸とも天柱ともいふべき朱塗の巨柱が、海を壓して跨つて居るではないか。向うを見ると、青雲の中に沖つた彌山の麓には、二十幾棟の社殿が美しく左右に伸びて、赤い柱がゆるやかに反つた檜皮葺の神々しい姿を、水面に映して居るではないか。その色彩を見よ、形状を見よ、一つ一つの建物の整つた姿を見よ、多くの建物が廻廊や橋に繋がれて、美しい釣合を現はして居るのを見よ、何といふ美しさ氣高さ神々しさであら

鳥居を
既

う。
 社殿の中心たる本社（本殿）の寶殿は（棟長サ）桁行十三間、梁行六間あるといふ。寶殿の左右には、百二十七間といふ長い廊下が廻らされて、その間に百八つの神さびた鐵の燈籠が釣つてある。この寶殿を中心として、檜皮葺瓦棟の多くの建物（五真行）が、朱塗の圓柱に支へられて低く美しく並んで居る趣、縦向き横向き、いろ／＼の社殿が仲よく（細部）馴染んで、大鳥が翼を廣げたとを細かに見せ、夜は百八の燈火——白砂青松の間に點在する石燈籠を加へると夥しい數に上る燈火——を天上の星にまがへ、干潮には大地に立つた脚長のすくやかな姿を



龍宮城の鳥居を望む

見せ、満潮には波の上に浮んだ龍宮城の幻のやうな光景を見せる趣、此等のすべてが何とも言はれぬ調和をなして、緑の山と白波の海との間に鎮まつてゐる趣、高さ大きな物々しさ（このめい）荒々しさは、前後の護衛者たる山や海や鳥居やに譲つて、社殿自らは、千木も堅魚木も（シヤクモ）鴟尾も（トビビ）鯨銚もない尋常な檜皮葺を、朱の圓柱に支へられて、低い謙遜な姿を横へてゐる趣、この重疊累積した美しさゆかかしさを何に譬へようか。

私はあの社殿を見る毎に、よくこんな事を考へる。設計者の鬼神は、海底で出来上つた龍宮城を、巖島のあの入江に据ゑる爲に、波の上にせり上げたであらう。靜かにせり上がるのを凝視しながら、山と海とに對する釣合を見計つて、こゝだ！といふ處で、びたりとせり上げを中止させたであらう。そしてこれを眺める恰好の立脚點を、今の大鳥居の位置に定めたのであらうと。(甲鳥園隨筆)

五 小園の記

正岡子規

我に二十坪の小園あり。園は家の南にありて、上野の森を垣の外に控へたり。場末の家まばらに建てられたれば、

正岡子規
名は常規。賴祭書屋主人・竹の里人等の號がある。俳人。明治三十五年(五六)歿。年三十六。
小園
東京市下谷區上根岸町。
上野
上野公園。

青空は庭の外に擴りて、雲行き、鳥翔る様もいとゆたかに眺めらる。初めてこゝに移りし頃は、僅に竹藪を開きたる跡とおぼしく、草も木もなき裸の庭なりしを、やがて家主なる人の小松三本を栽ゑて、稍物めかしたるに、隣の老嫗の與へたる薔薇の苗さへ植添へて、四五輪の花に吟興を鼓せらるること多かりき。

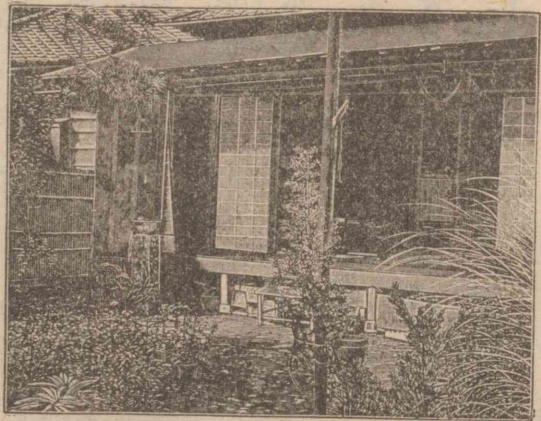
一年軍に従ひて金州に渡りしが、其の歸途病を得て、須磨に、故郷に、思はぬ日を費し、半年を経て家に歸り着きし時は、秋將に暮れんとする頃なり。庭の面去年よりは遙かにさびまさりて、白菊の一もと二もとねぢくれて、咲亂れたる此の景に對して靜かに昨日を思へば、萬感そゞろに胸に塞り、

軍に従ひ
明治二十八年從軍記者として遼東半島に渡つた。
金州
關東州金州城。
故郷
松山市。

三逕就荒
三徑就荒、松菊猶存、陶淵明、歸去來辭

辛あき命を助りて歸りし身の衰は、たゞ此の嬉しさに勝たれ
て、思はず、三逕就荒と口ずさむも涙がちなり。ありふれた
る此の花、狭くるしき此の庭が、斯くまで人を感じしめんと
は、曾て思ひよらざりき。まして此より後、病いよく、募り
て足立たず、門を出づる能はざるに至りし今、小園は余が天
地にして、草花は余が唯一の詩料となりぬ。余をして幾何
か獄窓に呻吟するにまさると思はしむるものは、此の十歩
の地と數種の芳葩とあるがために外ならず。
次の年、春暖漸く催して、鳥の聲いとうらゝかに聞えしあ
る日、病の窓を開きて、端近あくにじり出で、讀書に勞れたる目
を遊ばすに、いきくとしたる草木の生氣は、手のひらほど

の中にも動きて、まだ薄寒き風のひやくくと病衣の隙を侵
すも、いと心地よく覺ゆ。これも隣の嫗より貰ひしといふ



子 眞晝過より、夕陽椎の樹に落つ
るまで、何を見るとなく、酔うた
るが如く、勞れたるが如く、うつ
とりとして日を暮すことさへ
多かり。

れて、弱り盡くしたる余は、此の時、新に生命を與へられたる

小兒の如く、此より萩の芽と共に健全に育つべしと思へり。
 折ふし黄なる蝶の飛び來りて、垣根に花をあさるを見ては、
 そらろに我が魂の自ら動き出でて、共に花を尋ね、香を探り、
 物の芽にとまりて、しばし羽を休むるかと思へば、低き杉垣
 を越えて隣の庭を打廻り、再び舞戻りて、松の梢にひらく、
 水鉢の上にひらく、一吹き風に吹きつれて、高く吹かれな
 がら、向うの屋根に隠れたる時、我にもあらず惘然として自
 失す。忽ち心づけば、身に熱氣を感じて、心地なやましく、内
 に入り、障子たつると共に、蒲團引被れば、夢にもあらず、幻に
 もあらず、身は廣く限なき原野の中にありて、今飛去りし蝶
 と共に狂ひまはる。狂ふにつけて、何處ともなく、數百の蝶

まじり想もたふまじりした

げんく
れんげ草のこと。
紫雲英。

の群來りて遊ぶを、つらく見れば、蝶と見しは皆小さき神
 の子なり。空に響く樂の音につれて、彼等は躍りつゝ舞上
 がり飛び行くに、我もおくれじと茨葎のきらひなく踏みし
 だき、躍り越え、思はず野川に落ちしよと見て、夢覺むれば、寢
 汗したゝかに襦袢を濕して、熱は三十九度にや上りけん。
 げんくの花盛り過ぎて、時鳥の空におとづる、頃は、赤
 き薔薇、白き薔薇咲満ちて、かんばしき色は見るべき趣なき
 にはあらねど、我が小園の見どころは、まこと萩芒のさかり
 にぞあるべき。今年は去年に比ぶるに、萩の勢強く、夏の初
 の枝ぶりさへいたく蔓りて、末頼もしく見えぬ。葉の色も
 去年の稍黄ばみたるには似ず、緑いと濃し。空晴れたる日

鷗外漁史
森林太郎の號。醫
文學博士。大正十
一年段、年六十三。



百日草



葉雞頭



不折子
中村不折。洋畫家。
名は鉦太郎。

れ残りたる萩の泥を洗ひたりしかど、空しく足の痛みを増したるばかりにて、泥つきし枝のさきは、蓄腐りて、終に花咲くことなかりき。園中何事もなきは、只松と芒とのみ。

去年の春、彼岸や、過ぎし頃と覺ゆ。鷗外漁史より草花の種幾袋贈られしを、直ぐに播きつけしが、百日草の外は何も生えずしてやみぬ。中にも葉雞頭を欲しかりしを、口をしく思ひしが、何とかしけん、今年夏の頃、怪しき芽をあらはし、ものあり。去年葉雞頭の種を埋めしあたりなれば、必定それなめりと、竹を立て、大事に育てしに、果して二葉より赤き色を見せぬ。嬉しくてあたりの晝照草など引きのけ、やうく、尺餘になりし頃、野分荒れしかば、こればか

り氣遣ひしに、思の外に萩は折れて、葉雞頭は少し傾きしばかりなり。扶け起して竹杖に縛りなどせしかば、恙なくて今は二尺ばかりになりぬ。瘦せてよろくとしながら、なほ燃ゆるが如き紅しだれて、いとつくし。二三日ありて、向の家より貫ひ來れりとて、肥え太りたる鶏頭四本ばかり植添へたり。其の次の日なりけん、朝まだきに裏戸を叩く聲あり。戸を開けば、不折子が大きな葉雞頭一本引提げて來りしなりけり。朝霧に濡れつゝ、手づから植ゑて去りぬ。鶏頭、葉雞頭、かゝやくばかり、華やかなる秋に壓されて、萩ははや散りがちなるも、あはれ深し。薔薇、萩、芒、桔梗など、を恵まれて、余が小樂地の創造に力ありし隣の老嫗は、其の

別

後移りて他に在りしが、今年秋風に先立ちてみまかりしとぞ聞えし。こてくと草花植ゑし小庭かな。

(子規全集)

六 俳句評釋

河東碧梧桐

河東碧梧桐
名は兼五郎。松山市の人。俳人。昭和十二年歿、年六十五。

荒海や佐渡に横たふ天の川

芭蕉

これは奥の細道にある句で、芭蕉が奥羽から三越路へかかった時の作である。古來壯大な景色を叙した句として尊重されて居る。下には浪の荒れた海が渺々として居つて、空には天の川が大きく佐渡の方へ横たはつて居るといふのである。越後の海岸に立つて、佐渡を向ふに眺めなが

奥の細道
芭蕉が東北・北陸地方を旅行した時の俳文の紀行である。

のやまぢき

ら日本海のひろくした景色に接して、かくありのまゝを叙し、さうして雄烈絶大人をして其の實境に接するの思あらしむる手腕は、正に芭蕉の伎倆圓熟の時であつたらうと



(作良重本宮) 蕉 芭 人 旅

南北に横たはつて居るもので、佐渡に横たふといふのも架空でない。これらを指して客觀的叙景の理想の句といつてもよいのである。芭蕉の所謂萬古不易の作をなしてゐ

其角

榎本氏。又寶井氏をも稱した。江戸の人。俳人。芭蕉の門下。寶永四年(一七二七)歿、年四十七。
三井寺 滋賀縣大津市の郊外にある園城寺。

雪舟

畫僧。山田氏、名は等揚。備中の人。永正三年(一三二六)歿、年八十七。
雲慶 鎌倉時代の代表的佛師。歿年不詳。

蕪村

俳人、谷口氏。また與謝氏。大阪の人。天明三年(一八二二)歿、年六十七。

る。

由寂 せんむ

からびたる三井の仁王や冬木立

其 角

三井寺のからびた仁王の立つて居る側に冬木立のある景色を叙したのである。「からびたるは、ひからびたる」の略で、色も禿げ、處々蠹みても居るやうな古びた様である。古びた仁王に木の葉も落ち盡した冬の森の配合は、雪舟の畫幅も及ばぬ、雲慶の彫琢も如かぬ、蒼古な作品である。この句も恐らく三井寺に詣でた時の寫生の句であらう。芭蕉の「荒海」とは趣を異にした千古不磨の句である。

廣庭の牡丹や天の一方に

蕪 村

廣い庭があつて其の片隅に牡丹が大きく咲いて居る。

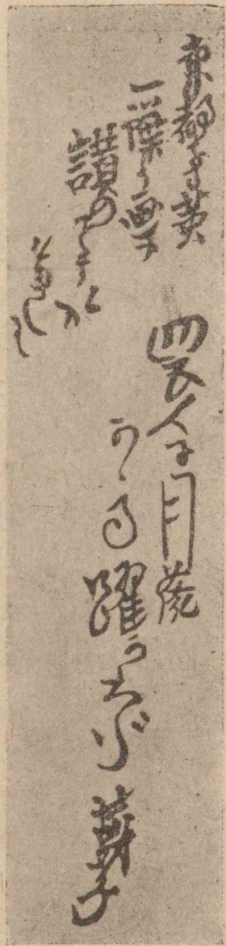
東坡

支那宋代の詩人、蘇軾の雅號。

筆蹟

東都なる英一蝶か畫に諷のそま
れければ
四五人に月落かゝ
る躍かな 蕪村

それを「天の一方に」と形容したもので、語は東坡の「望美人兮天一方」から借りたものである。牡丹の花の赫奕と咲き満



蕪村筆蹟

ちて居る様が眼前眩しいやうにも見えて、廣庭の堂々とした様も聯想される。

牡丹の花の眞の趣味の發揮されたのも、全く蕪村の達腕の致す所であつて、それ以前には牡丹の趣味を諷詠したものがなかつた。芭蕉の幽玄主義からいへば、牡丹などは餘

りに花やかに過ぎた。淡墨の畫を愛する人には、牡丹の極彩色は稍、俗に感ぜられたのであらう。又一方からいへば牡丹あつて蕪村の趣味を託するに足りたのかも知れぬ。

闇玉の口や牡丹を吐かんとす

寂として客の絶間の牡丹かな

地車のとゞろと響く牡丹かな

その外、蕪村には牡丹の名句が澤山あり、悉く金玉の音を發して、古今の俳句中に卓然として雄を示してゐる。

夕汐や柳がくれに魚分つ

白雄

海濱の漁村では夕汐の満つるにつれて魚を釣るとか網するとかいふ事がある。その句は其の光景を叙したので

白雄
俳人。加舎氏。信
州上田の人、寛政
三年(四五)歿、年
五十三。

ある。夕汐やは俗にいふ夕河岸といふやうな意味も含まれて居つて、正面の意味は夕の汐といふ事であるけれども、裏面には其の夕汐に乗じて魚を捕つたといふ事を現はして居る。魚を取つた漁師が柳の木の下で魚を分けて居るといふので、夕の鮮魚が柳の青々とした下に潑刺として居る光景は眼が覺めるやうである。さうして其の片方には海が漫々と廣がつて居る。その爲に幾分か魚の生臭味も消されるやうで、俗な事が却つて高雅なやうに感ぜられる。尙夕汐といへば多少穩かな感じがするし、そこに柳の下で漁師などが吞氣に魚の分配をして居るといふので、漁村の悠長な趣味を叙した趣もある。

三受期

七 言葉の變遷

佐々醒雪

佐々醒雪
名は政一。京都の
人。文學博士。大
正六年歿。年四十
六。

日本語は幸にして二千年近い記録を存してゐて、世界で頗る古い言語の一つである。而も萬世一系の帝室を戴いた同一民族の間にのみ發達したので、今から約千年前に出來たといはれる「竹取物語」や「伊勢物語」を見ても、半分以上は今日も平生使用してゐる言語で出來てゐる。こんな國はいふまでもなく、世界に又とはない。一千年前即ち十世紀前といへば、今の歐洲列強國などは、皆全くの野蠻國であつた。かく久しい時代を経てゐるから、同じ語でも、その意味は頗る變化したものが多し。

例へば、甚だしく變遷したのは、「いへ」といふ言葉である。昔は「いへ」といふと、家族とか、家庭とかいふことで、隨つて「いへあるじ」といへば、一家族中の主長、即ち戸主のことであつた。

然るに今日「いへ」といふと、家屋即ち建築物のことで、「いへぬし」は借家の持主の義に用ひられてゐる。

かゝる變遷は、そんなに古



佐々醒雪

い時代ばかりではない。漢語が頻りに用ひられ始めてからも、同様の變化は認められる。例へば「不用」といふ語は、今日では「入用でない」といふことであるから、紙屑買が「御不用

爲朝
鎮西八郎爲朝。
爲義
源爲義。

物は御座いませんか。と呼んで来る。然るに中古では、不用なる者といふと、用ふるに堪へぬ鈍物か痴呆者のこと、更に降つて武家時代に入ると、爲朝が不用であつたから、父爲義が九州に追つた。などと記してあつて、不用といふのは、悪戯者又は無法者の義である。鎌倉時代に、不用なものは御座いませんか。と呼び歩いたら、悪戯者はないかな。と呼びあらく鼠取薬と間違へられたであらう。

此等は未だ單なる變遷で、中にはその變遷の間に、語源の意義に對して奇怪なる矛盾を生ずることもある。漢方醫が廢れて薬を煎じることがなくなつても、薬罐といふ名は残つてゐたり、白馬と書いて、あをうまと讀んだり、赤くなく

草雙紙

徳川時代に行はれた一種の短篇小説。多くは平假名ばかりで書き中に挿畫がある。

でも、粗末な本を赤本といつたり、黄色な表紙の草雙紙を青本ともいつたり、不思議な言葉を列擧すれば、際限もないが、就中不思議なのは、茶碗やさかなである。

日本でまた立派な陶磁器の出來ないころ、支那から渡つて來た上等の陶磁器は、専ら抹茶の席ばかりに用ひたからこれを茶碗といつた。然るに日本で硬い上等の物が澤山出來るやうになると、飯を食ふにも、番茶を飲むにも、陶磁器を用ひはじめた。そこで飯食茶碗とか、茶飲茶碗とかいふ不思議な語が出來た。今日では珈琲茶碗とさへいつてゐる。茶を飲むのが茶碗なら、飯を食ふのは飯碗、珈琲を飲むのは珈琲碗といひさうなものだが、さう理窟通りには行か

ない。

言葉は又使つて居る中に段々下落するものである。例へば大工といふ語は、工藝家中の俊秀なもの、尊稱で、多くの小工どもの頭領を呼ぶ名であつた。然るに今日では建築事業にたづさはる者は、小屋掛の叩大工でも、やはり大工である。かの親方なども同様で、今日では一人の手下をも持たない男でも、印袴纏さへ着て居れば、即ち親方であり、頭領である。

又、迷信から來た變造語といふべきものもある。例へば海邊に生えてある「蘆」といふ草を「悪し」と聞えるといつて、わざと「葎」と呼びかへたり、「四」の音を忌んで「よ」といつたり、「梨」を

「ありの實」硯箱を「あたり箱」、鯛を「あたりめ」といふ類が多少は行はれて居る。古も、伊勢の大神宮に御奉仕になる齋宮様の御所では、髪のない僧侶のことを、わざと「髮長」などといった例もある。

かやうに同一の語が、例へば髮長といつて髪のないことをあらはすやうに、正反對の意味にさへ用ひられるのであるから、言葉の變化はその窮極を知ることが出來ないのである。(醒雪遺稿)

八 當になる人

徳富蘇峰

此頃、或學校の卒業生あり、余に向つて成功の秘訣を問ふ。

徳富蘇峰
名は猪一郎。熊本
縣の人。文學者。
歴史家。貴族院議
員。大阪毎日新聞
社社員。

余未だ成功の何たるかを詳かにせず、況やその秘訣をや。然りと雖も、已むなくんば則ち一あり、曰く當あてになる人たれと。是甚だ易きが如くにして、實は難し。如何に天才なりとも、如何に俊英しゅんえいなりとも、將た如何に勉強すとも、辛抱力逞しくとも、若し當にならぬ人ならば、何人も彼を相手とせざるべく、また世の中が相持あひまちなることを知らば、他より相手とせられざる人にして世に立たんこと頗る覺束なきを知らん。

如何なる仕事にせよ、相手なきはなし。若し其の相手が我を信用せざるに於ては我は何事をも爲す能はざるべし。人の上に立つには、下より信用せらるゝ必要あり。人の下

につくには、上より信用せらるゝ必要あり。仲間同士に於ては、相互の信用必要なり。此の信用を具備する人を稱して、當になる人と云ひ、然らざる人を稱して、當にならぬ人と云ふ。

當にならぬ人、必ずしも無能の人にあらず。否、中には自己の能力を恃みて、大概の我儘わがまま氣隨きずいを働きたりとして何の妨かあらんと、自ら高を括くわりて然しかする人もあらん。然り、社會は時としては、當にならぬ人をも餘儀なく當にせねばならぬ場合なきにあらず。されど是は社會が自ら好んで然するにあらず、已むを得ずして然するなり。故に若し機會あらば、社會は欣然として當にならぬ人を當にせぬことにす

べし。而して斯くの如くして、多くの才物英物は、社會の外に葬り去らるゝに至るなり。

當にならぬ人といふにも、幾多の種類あり。或者は無責任なり。即ち當然自己が爲さねばならぬ事を、悪意にはあらざる迄も、無頓著にて閉却するなり。彼は悪意なきを恃みとして、別段之を悔いざれども、相手の迷惑は悪意の有無に關係なきなり。失念と云へば立派な物忘れ「迷惑の程度は失念と云ふも、物忘れと云ふも、事實に於ては同一なるを知らざるべからず。

或者は飽性なり。今日は此の事に熱中し、明日は彼の事に熱中す。人は化石にあらざれば、其の當然の經路を辿り、

人にして云々
「論語」子路篇にあ
る。

尋常の順序を踏んで變遷するは、決して差支なきのみならず、寧ろ精進の勇猛心を稱美すべしと雖も、一時の出來心に任せて、風のまにまに、移り行くは甚だ危険なり。少くとも相手をして甚しく危険の感あらしむ。論語に人にして慥なくんば、以て巫醫にだも作ること能はずとあり。恒なき人は當にならぬ人なり。

又或者は責任も知り、恒心もあれども、已むを得ざる事情の爲に一定の歩起を以て日常の軌道を行く能はざることあり。而して其の事情の過半は健康問題に歸著す。即ち心は矢竹の進れども、其の體力これに順應せざるに於ては致し方なし。才子多病とはいへども、多病は決して才子の

人たる要件の一なり。されば身體の健全を保持するは、當になる人たる要件の一なり。然り、主要なる一なり。

今日において人を採るの法は、第一に、その健康如何にあり。第二に、その恒心如何にあり。第三に、その責任の念、責任感如何にあり。この三者具備するに於ては、才も不才も、それ相應に當になる人たるを得べし。既に當になる人たらば、世に之を當にせざるものなかるべく、過分の野心を懐かざる限りは、如何なる意味に於ても間違なく成功を收むべし。

凡そ向上の工夫は反省に若くはなし。人若し我に向つて其の機密を語らずんば、我が他人の機密を護るに於て缺



點あるを顧み、決して他を咎むべからず。苟も、彼は如何なる場合に於ても大事を打明くべき人なりと信用せられたる曉には、大事にても小事にても必ず與り聞くを得ん。人若し我に信賴せずんば、我は他人の薄情を憤るに先んじて、何故に斯くの如きかを點檢するを要す。何人も常にその相手を尋ね廻り居るものなり。若し我に於てそれだけの信用あらば、何人か我を相手とせざらんや。

諸葛孔明の一生は謹慎の二字にありき。虞翁は曠野の人物として、君子的英雄として、一代の崇拜を集め得たれども、動もすればその部下より疑懼の念を懐かれたるは、彼が往々前後左右に頓著なく、乘氣にて乗出したることあれば

諸葛孔明
蜀漢の忠臣。名は亮。西紀二三四歿。
虞翁
グラッドストーン。
十九世紀に於けるイギリスの大政治家。

劉玄德
名は備。蜀漢の昭烈帝。章武三年崩。年六十三。

貝原益軒
江戸時代の學者。名は篤信。筑前の人。正徳四年(一三三)歿。年八十五。

なり。別言すれば、聊か當にならぬ氣味ありたるが爲なり。之に反して、諸葛孔明の如きは、何處までも當になる人たりしを以て、劉玄德が其の天下をも一家をも擧げて彼に託せしなり。(第九日曜講壇)

九樂訓

貝原益軒

我が身の足る事を知りて、分に安んずる人まれなり。多くは分外を願ふによりて樂を失へり。知足の理をよく思ひて、常に忘るべからず。足る事を知れば、貧賤にしても樂しむ。足る事を知らざれば、富貴を極むれどもなほあきたらずして樂しまず。かくて富貴ならんは、貧賤なる人の足

ることを知れるには遙かに劣れり。富貴貧賤は賢愚によらず、たゞ生れつきたる分あり。賢者も貧しく、不肖者も富める人多し。これ生れつきたる分なり。分に安んじて、分



貝原益軒

外を羨み願ふべからず。外を願ふ人は樂なくして憂多し。禍も亦これよりおこる。愚なりといふべし。世には福われ程もなき人多し。われよりも下なる人を見て、足る事を知り、分に安んじ、外を願はざれば、憂なく、樂多くして禍なし。又極めて貧しき人も、人おのく生れつきたる分ある事を知りて、分に安んじて、天をうらみ

人をとがむべからず。

二

富貴なればおごり易くして此の樂を得がたし。貧賤の人は怠り少くしてさとし易し。富貴の人は世のはかなきわざ多きに迷ひて、書を読んで道を樂しむことを知らず。然れば富貴なるは却つて不幸といふべし。此の大いなる樂を得難ければなり。古語に貧しきは富めるにまされりといひ、又讀書は貧者の樂といへるも宜なり。我がともがら愚にして又いやしければ、塵ひちの數にもあらぬ身なれど、書を讀み道をたふとぶ樂は、いかなる富貴にもかへ難し。

三

清福といふ事あり。樂を好める人必ず之を知るべし。これ諷者の樂しむ所にして、俗人は知らず。この故に我が身に清福を得て大いなる幸あれども、之を知りて樂しめる人まれなり。たとへば寶の山に入りても、寶を知らざれば手を空しくして歸るが如し。清福は富貴の驕樂なる福にはあらず。貧賤にして時に遇はずとも、其の身安く靜かにして心に憂なき、これなん清福とぞいふめる。暇ありて閑かに書を讀み古の道を樂しむは、これ清福のいと大いなる樂なり。また其の心風雅にして、古書を讀み、詩歌を吟じ、月花をめで、山水を好み、四時のおしうつる折々の美景と、草木

のかはるく榮えうるはしきを見て樂しみ、貧しけれど飢寒の憂なく、蔬食口に馴れぬれば味ひありて、肥濃なる美味を羨まず。淡薄なるはかへつて身を養ふに宜し。布の衣、紙の衾、いさゝか寒を防ぐに足れり。葎おひてあれたる宿に起き臥しても、風雨の憂なかるべし。もし幸に書を多く貯へて架にさしはさまば、貧とすべからず。これ眞の寶なれば、滿籛の金にまされり。また良友ありて道を論じ、同じく月花を賞して樂しみ、名區佳境に遊びて、其の地の異なる形勝を弄ぶ。これ皆清福を得たるなり。いかなる縁ありてか、かゝる福をうくるは、富貴の驕樂にまさりて幸甚だし。

四

滿籛の金
籛一杯の金、遺子
黃金萬籛、不如此
一經（漢書、韋賢傳）

萬戶侯
支那にて一萬戶の封邑を領する諸侯

旅行して他郷に遊び、名勝の地、山水の美はしき佳境に臨めば、良心を感じ起し、鄙吝を洗ひすゝぐ助となる。是も亦わが徳を進め、知を廣むるよすがなるべし。又いひ知らぬ異境に行きて、見馴れぬ山川の有様を見て目を遊ばしめ、其の里人に逢ひて其の處の風土を問ひ、あるは奥まりたる山ふところ、岩根踏みて尋ね入りなどせば、山水の癖ありて青山夢に入る事しきりなる人は、心をとめて歸ることをも忘れぬべし。あるは海べた山遠き眼界廣き眺は、萬戶侯の富にも勝れり。又其の里に生ひ出でたる名産の異なる品を見て、其の味を試みるも、いと珍しく、心慰むわざなり。すべて勝地に遊ぶことはたゞ一時の耳目を悦ばしむるのみ

ならず、幾年経ぬれど、其の時見聞きせしありさま、老の後ま
でをりく、思ひ出でられて、樂しきものなり。世にめでた
き事を思出といふも、宜なるかな。(益軒十訓)

たのしみはめづらしき書ひこに借りはじめ一ひらひろ
げたる時
(獨樂吟 橘曙覽)

一〇 わが家の富

徳富 蘆花

家は十坪に過ぎず、庭は唯三坪。誰かいふ、狭くしてかつ
陋なりと。家陋なりと雖も、膝を容る可く、庭狭きも碧空仰
ぐべく、歩して永遠を思ふに足る。

徳富蘆花
名は健次郎。熊本
縣の人。文學者。
昭和二年歿。年六
十。

神の月日は此處にも照れば、四季も來り見舞ひ、風雨雪霰
かはるく、到りて、興淺からず。蝶兒來りて舞ひ、蟬來りて
鳴き、小鳥來り遊び、秋聲また吟ず。靜かに觀ずれば、宇宙の
富は殆んど三坪の庭に溢るゝを覺ゆるなり。
庭に一株の老李あり。春四月の頃ともなれば、青白き花
開いて、樹に滿つ。風ある日には、青々と霞める空より白き
花ちらく、と舞ひて、一庭を雪を散らす。
隣家に花樹多し。風に従ひて飛花吾が庭に落つ。紅雨
霏々、白雪紛々、見るがうちに滿庭花の衣を着く。仔細に見
れば、桃の花あり、櫻あり、椿の花瓣あり、山吹の花あり、李の花
あり。



くちなし

庭隅に一株の山梔あり。五月闇鬱陶しき頃、香しき白花を開く。主も妻も無口なれば、此の花の吾が家に開くは宜なりけり。

老李の背後に一株の碧梧あり。碧幹亭々として些の邪なく、吾が如く直かれと教ふるに似たり。梧葉と手水鉢の側なる金剛纂は、葉廣うして、吾が家の雨聲を多からしむ。李熟して白粉ふきたる琥珀玉の滾々と地に落つる頃は、與へて喜ぶ男の子一人欲しと思ふ心も起りぬ。

つく／＼ぼふしの聲に、世は何時か秋に入りて、山茶花咲き、三尺ばかりの楓も紅に燃えいで、唯一株、前の家主の植ゑ残したる黄菊も咲き出づ。名苑の花美しと云ふとも、秋の



山茶花

蛻巖の翁

梁田蛻巖。名は邦美。字は景鸞。播州明石藩士。儒者。漢詩人。寶曆七年(一四七)歿、年八十六。

獨憐云々

瑣樹連天秋色飛。獨憐細菊近荆扉。登臨高處賦誰是。海内文章落布衣。(蛻巖詩文集) かくや姫

竹取物語の女主人公。身の丈三寸許で竹中に在つたのを竹取翁に見出されて育てられ、月夜、天人に迎へられて昇天する。

あはれ閑寂の趣は、却つて吾が庭の一枝にある可し。蛻巖の翁なりせば、獨憐細菊近荆扉とや吟せむ。恥づらくは海内文章落布衣と唱す可き身にあらざるを。

屋後に一株の銀杏あり。秋深くして満樹金よりも黄なり。風の風起れば、かくや姫の扇にせま欲しき其葉翻々として飜り落つ。半夜夢さめて雨かと疑ひ、曉に起きて戸を開けば、庭は一夜に金色となりぬ。屋根も、庇も、手水鉢も、處として落葉ならざるはなく、紅葉さへ落ち添ひて、寸金と人は云ふなる錦を吾は庭に敷きぬ。

木の葉落ち盡しては流石に淋し氣なるも、日影月影いよいよ多くなりて、空を見、星を見るに、障り少なきは嬉し。

(自然と人生)

石井滿
千葉縣の人・評論家。

一一

蜜柑船と蠶臺渡し

石井 滿

今と昔とでは、社會の各方面に大變な違がある。舊幕時代には、加賀の米について、大阪の人は加州米といへば、殊の外悪い米で、口に入れ、ばぐしやくして、一向膏のない米であると思つてゐる。然るにその産地の加賀に来て見れば、加賀は天下第一の肥沃の地で、米も上等である。大阪の人が加賀米は悪いと思つてゐるのは、加州藩にむづかしい規則があつて、なか／＼土地の米を外へ出さず、僅かに悪い米を大阪へ出すからだ。と云はれたものである。これは、農民が自分の食べるものを自分で作るといふ、所謂自給自足

文化の差、西をみる、海方面

徳川幕府

郷里
千葉縣君津郡湊町。

の生活をしてゐたばかりでなく、一つの藩も亦、その領分内で自給自足の經濟を立て、ゝゝゝた結果である。

今日の有様は、これと全く違つてゐる。私の郷里の房總の海岸に行つて見ても、良い魚は大概東京や横濱に移出されてしまつて、土地には餘り残らない。房州の鮪を房州人はその土地で食べられないといふ有様である。旅先から、北海道や青森の林檎、山形・福島の櫻桃などを東京に贈る人がよく、その土地の名物を買つて贈るのだから、値段が安く、いゝ贈物であると思はれては困る。この頃は名産の出る地方に來ても、小賣の値段は必ずしも東京より安いとはいはれない。記念といふ意味を十分味つてもらはなければ

ば、折角手数をかけて贈つても何にもならない。」といふ。彼と此、まことに面白い對照ではないか。

加州藩のしたやうに、禁令を作つて領内の産物を、他の方に積出すことを制限した時代を過ぎて、その土地の産物を他地方へ賣出すやうになつた後でも、荷物を運送する設備が十分に發達してゐないために、なかく、日本内地においてさへ、不自由なことが尠くなかつた。

沖の暗いのに白帆が見えるあれは紀の國蜜柑船

といふ俗謡を見るがいふ

紀州は蜜柑の本場である。或年の冬のこと、この國では、殊に蜜柑の出來がよかつた。大きな樽に入れた蜜柑は山

鞠祭

陰曆十一月八日に
行ふ。鍛冶屋の守
護神稻荷の祭事。

紀の國屋文左衛門

紀伊の人、江戸へ
出て富豪となつ
た。享保十九年(一
七三〇)歿、年六十六。

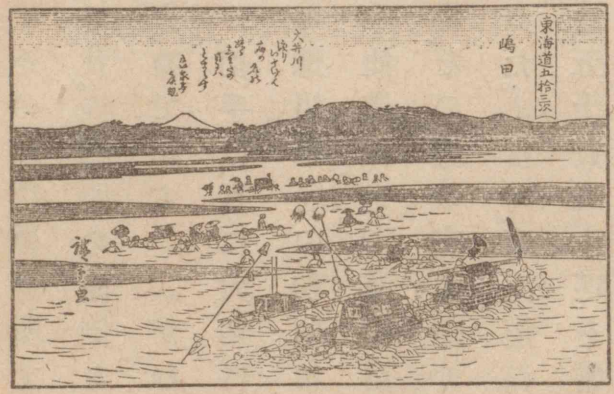
ほどあるが、殆ど捨賣同様であつた。それに引換へて、江戸では海上の暴風の爲に、何處からも蜜柑が來ない。それ故、年中行事の鍛冶屋の鞠祭が出來ない。それを見越して、紀國屋文左衛門といふ男が、決死隊ともいふべき船頭達を、一艘の船に乗込ませ、捨賣も同様の蜜柑を江戸まで運んで來た。思ひがけないこの蜜柑の入荷に、八百八町の鍛冶屋さん達は喜んだ。負けぬ氣の江戸つ兒の常として、先を争つてその蜜柑を買つたので、文左衛門は莫大な金を儲けたといふのである。まるで夢のやうな話ではないか。

安政の大地震に材木成金が出來た話は聞いてゐるが、大正の大震災の後には、東京は却つて材木が餘つて、儲けるつ

安政の大地震
安政元年十一月四
日及び五日。
大正の大震災
大正十二年九月一
日。

もりて始めた材木屋が、破産の憂目を見たものさへあつた。明治初年の東北の飢饉に、死んだ人は随分多いが、大正の大震災の時には、玄米飯を食べるのも三四日で済んで、やがて各方面から食料品が速かに供給された。その救恤品は獨り日本内地からばかりではなく、遠い外國からも可なり敏速に送られた事は、まだ私共の記憶に新なる所である。人の移動といふ方面に就て見ても、遠い昔は姑く措いて、徳川時代の交通は、非常に面倒なことになつてゐた。その理由はいろいろあるけれども、第一に戦争の都合上でもあつたらう、各街道に關所を設け、旅人がそこを通過するには、必ず印手を必要とし、忍んで關所を通過するものは重追放

馬入川 神奈川県中央を流れて相模灣に注ぐ。
富士川 山梨縣・静岡縣を流れて駿河灣に注ぐ。
安倍川 興津川 大井川 ともに静岡縣を流れて駿河灣に注ぐ。



(筆重廣) し 渡 臺 輦

一 蜜柑船と輦臺渡し

に處し、脇道を越した者は、直ちに磔刑に處した。又東海道の諸川中、馬入・富士・安倍・興津・大井の川々には、故らに橋を架せず、舟を置かず、旅客は川越の人夫の肩の輦臺に乗つて渡る外はなかつた。一度大雨が降つて、川水が増すと、忽ち行旅は停滞し、その混雑と迷惑とは名狀し難いものがあつた。箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川といふ話がよく當時の状態を説明してゐる。

勸進帳
三代並木五瓶作。
安宅關で源義經が
關守富樫左衛門に
見咎められ辨慶の
奇智で虎口を脱し
た事を劇化したも
の。

その箱根の關所でさへも、またなか／＼厄介なものであつた。關所の面倒なことは、古い芝居の「勸進帳」にもあるぐらゐで、頗る詮議がむづかしかつた。だからこの關所を通る切手は、實に大切にされたものである。

徳川幕府の初期に於ける我が國の交通の幹線は、東海・道中・仙道・日光街道・奥州街道・甲州街道の五つの外、中國・山陰・南海、その他の交通路であつた。これに、それ／＼驛・宿場があつた。當時、東海道に於ては、各驛の人夫百人、馬百匹、中仙道は、五十人、五十匹を常に備へておかせ、それでも足りない時には、驛の近隣の諸村から助を借りた。これが驛傳の制度で、宿次傳馬といつた。この常備の人夫や驛馬による運賃

慶長
後陽成天皇の御代
の年號。

には、無賃規定賃錢及び相對賃錢の三種があつた。無賃で運んだのは、お上の御用のもので、幕府の朱印證文を有するものに限るとなつてゐた。尤も公用でも、賃錢を支拂つたものもある。その外の品物を運送してもらふのに、定賃か相對賃錢かを支拂つたのは申すまでもないことで、家康が幕府を江戸に開いた翌年、即ち慶長九年に、既に宿道の賃錢を一里十六文とし、私道では適當な増賃を取らせた。

この規定賃錢は、物價の高低に應ずる爲に、屢變更された。またその需要が多いので、増賃錢を請求するやうな善からぬものもあつた。それ故、不當な相對賃錢の請求を禁じ、犯すものは嚴罰に處するやう、幕府から命令を出したことが

ある。昔の旅が如何に困難であつたかといふことは、可愛
い兒には旅をさせよ。」とか、旅は道づれ、世は情。」とかいふ言葉
でもわかる。

延喜式によれば、相模國から京都まで、上り二十五日、下り
十三日、武藏國から京都まで、上り二十九日、下り十五日とあ
る。當時の標準速力は、馬が一日およそ十一里、歩行は八里
餘であつた。

延喜式
五十卷。醍醐天皇
の延喜年間に、藤
原時平等勅を奉じ
て編纂し、朝廷年
中の儀式、百官臨
時の作法等を記録
したもの。

都をば
平安朝時代の歌
信能因の歌。

みやこをばかすみとともに立ちしかどあきかぜ
ぞ吹く白河の關
と歌にもある通り、春霞、都門を出で、秋風、白河に入るといつ
たやうな譯で、當時の人には、日本六十餘州はかなり廣大な

芭蕉
松尾氏。元祿時代
の俳人。「奥の細
道」はその奥羽・北
陸の紀行である。
一九
十返舎といつた。
江戸時代の小説
家。



江戸時代の大名行列

土地のやうに思はれたことであら
う。況んや親の敵討などで、あてど
もなく唯、一人の仇の行方をぶらぶ
らと捜し廻るのは、全く氣の長いこ
とである。それだから芭蕉の「奥の
細道」のやうな文章も、また一九の「東
海道膝栗毛」のやうな文學も、旅から
得られた譯である。
昔の街道といへば、松竝木があつ
て、掛茶屋がちらほらしてゐる。そ
こに、長槍大駕、大名の行列が通る。

馬の鈴を鳴らして、驛傳のものが行く。伊勢參宮や京上りの商人が往來する。まるで繪巻物を見るやうなものであった。(鐵道讀本)

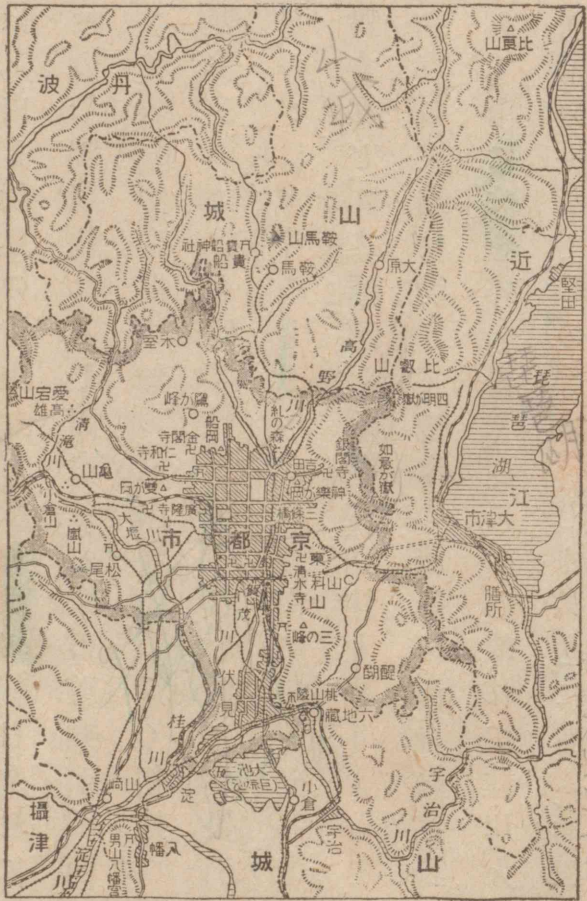
一二 平安京

藤岡作太郎

日本は世界の樂土なり、東亞の伊太利なり。山川の風景往く所として佳ならざるなきが中に、殊に衆美を鍾め、群を抜いて立てるを京都とす。京都附近の景は、日本のすべての景をエキスにしたるもの、規模の雄大豪壯なるものは存せずといへども、晴麗輝耀の形態は備へざるなし。東に近く比叡如意が嶽より三の峰まで、東山三十六峰笑ふが如く、

藤岡作太郎
金澤市の人。國文學者、文學博士、東京帝國大學助教。明治四十三年(一九一〇)歿、年四十一。

北には鞍馬・貴船・氷室・鷹が峰・高尾の山々波濤の如く、西にや



京都附近

かに、或は目覺むるやうなる櫻の入交るあり、或は紅燃ゆる

や隔りて
愛宕・小倉
龜山・嵐山
松尾より
山崎に至りて地勢は窮る。松柏の緑、色濃きな

比叡山頂の稱。

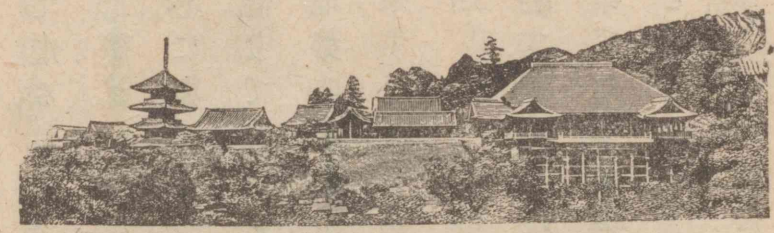
紅葉を織込みたるあり。一面の草の頂なる四明が嶽春な
 ほ雪白き比良の遠山などは、わけて朝日夕日に照りはゆる
 色の千變萬化なるぞ面白き。東の神樂が岡、西の雙が岡は、
 大和の畝傍香山耳無の三山の如く近く相並びてあらねば、
 妻争ひの口碑も傳らねど、子の日の遊に小松引く樂しみな
 ど、いづれ劣るぬとてころがら。南にや、隔りて男山これに
 對すれど、國家鎮護の八幡宮、宮柱太知りまして、仰ぐも畏し。
 京の東端に沿うて、鴨河の流、糺の河合に高野の支流を集
 めて、南に珠を碎き去り、西に少し離れて桂川、大堰の激湍に
 清瀧を併せて琴の音すゝしく又南に向ふ。二河南に合し、
 更に淀の急流に流れ込みて、沈々として西の方難波をさし

妻争ひ
萬葉集卷一に三山
の歌がある。

て走る。

茫々たる大海、濤湯たる波濤の壯觀なく、跌宕の觀念を人
 心に與ふるものなしといへども、一面よりいへば、山の内に
 籠りて海を見ざるは、またそれだけの長所なくんばあらず。
 地勢の勾配稍急なれば、蘆間に出て入る白帆の、町の側を往
 來する眺なきかはりに、濁りて底の明らかならざる河水を
 知す。京の水はわけてアルカリ性の鑛物を含めるにや、
 晒す布をも人の膚をも眞白にす。海そのものは清けれど、
 棄てたる塵埃を更に岸に打上ぐるに、藻の臭も添ひ、漁夫な
 どの居る處は、わけて見るにも嗅ぐにも心地よからぬこと
 多し。京都に海なきは惜しむべしといへども、海なくして

吉田
京都市の東北部、
今の吉田町。



清き京都は益、その清さを加ふるなり。
山紫水明の語はよく京都の景色をいひ
表はせり。何處の山水も日中より朝夕の
姿態の面白きは、水蒸氣の然らしむる所な
るを知らば、三面を山にして土地濕潤、水分
を含むこと殊に濃やかなる京都の朝な夕
なが、いかに變化に富めるかは、説明を須ひ
ずとも明らかなるべし。我が數年の滯留
の中、下京より吉田に通ひたる朝な夕
の景色は、今に恍惚として眼前にあるを覺ゆ。
引渡す霞に、三條の大橋の擬寶珠の一つ一

向うに寐たる
蒲團着て寝たる姿
や東山(服部嵐雪)
愛宕の峰
葛野郡にある。海
抜九二四米。

山科
京都市の東南山科
村。

つ彼方へくと淡くなりて、向うに寐たる東山は、有るかな
きかの夢より未だ覺めやらす。吉田の岡に並び立てる松
は墨繪の刷毛の濃く淡く、花賣る小女の姿は隠れて、聲をま
づ朝靄を漏れ來る。
時雨の景色のまたよその國には見られぬ様よ。愛宕の
峰を覆ひて白く光りたる薄布の、さては時雨と思ふうちに、
はらくと面を撲つ。あはやと驚きも果てず、雲は走りて
直ちに東山を包み、いつしかそれも霽れて、今は山科あたり
の山巡りするなるべし。かゝるやさしき景色は、山河襟帯
の平安京の特色なり。

(國文學全史)

沼田頼輔
神奈川縣の人。歴
史家、考古学者。
文學博士。昭和九
年歿、年六十八。

一三

紋所の話

沼田 頼 輔

我が國では、家があれば苗字があります。そして苗字が
あれば必ず紋所があり、近頃は白襟黒紋付とも申す位で、禮
服には必ず紋所を付ける事になつて居りますが、さて其の
紋所に關する知識はといふと、由來は勿論、名前すら知られ
てゐない場合が澤山あります。私は常にこれを遺憾とし
て居りましたが、先年山内侯爵家の家史編纂を依頼されま
した時、同家で桐の替紋を用ひて居られる事について、理解
しかねて困つたことがありました。又その後歐洲大戦争
の終らうとする時分に、大阪朝日新聞社から白耳義國王に

山内侯爵
當主は山内豊景
侯。

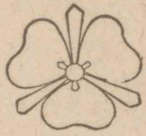
鶴の丸



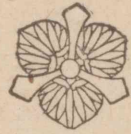
鶴の丸の紋の附いた太刀を献上する企があり、同社の海外
特派員が、その紋所の由來につき邦人に尋ねたが解らなか
つたため、英國の紋章學者に尋ねて、御下問の折の参考にし
たといふ事を聞き及んで、甚だ遺憾に思つた事がありまし
た。さやうな事が動機となつて、私は紋所の研究に没頭す
ることになりましたが、その取調に基づき、我が國の紋章が、
どういふ意味で用ひられたかといふ事について、極めて大
體のお話をして見たいと思ふのであります。

我が國の紋章といふものは、本來、武家時代に、或標章を旗
や幕の目印として使つたのに始まつたので、その結果、武裝
つた意味を含んだ紋章が非常に多いのであります。例へ

劍酢漿草



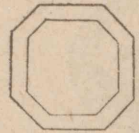
劍葵



三ッ巴



隅切折敷



ば、劍酢漿草、劍葵、劍桔梗など云つて、劍を花の間に取合はせて居るのがそれで、のみならず兜の鉄形や、總角や、脛楯や、その他弓矢は勿論、武器に關するものは、悉く紋所に用ひられて居ると云つてもよいのであります。但しかういふ武張つた紋所は多く、武家に用ひられたので、お公家衆には、かやうな紋所を用ひて居るのが少しもありません。それ故私はこの種類の紋所を、尙武的紋章と申して居ります。

これを第一種として、第二種は、戦争の際の功名手柄を後世に傳へる爲に作つた紋章で、私はこれを記念的紋章と名づけて居ります。例へば、徳富蘇峰氏の紋所を見ますと、八角の中に巴が畫かれてあります。八角と云ふのは、隅切の

天草の戦争

寛永十四年(二五七) 大矢野松右衛門等の耶蘇教徒が天草四郎時貞を擁し肥前島原城に據つて叛したること。

那須與一

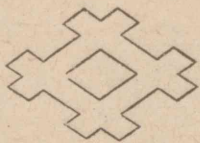
源氏方の弓の名手、下野那須の人。扇を射たのは壽永四年(八四三)。

折敷と申して、神様に供物を上げる時に用ひるものであります。が、徳富氏のお話によりますと、氏の先祖の方が天草の戦争の折に、敵の大將の首を取られ、これを首實檢に供する爲に、隅切折敷に載せて大將の^{見參}見參に供へられた、それに因んで此の紋所を作られたといふことで、巴は昔から、一つ頭、二つ頭などと呼んだものですから、これを敵將の首に擬え、折敷に載せて、新しい紋所を組立てたといふことは、いかにも武家に相應はしい話であります。かういふ種類の紋所は、澤山あつて、例へば、關ヶ原の合戦に、土佐の檜井と云ふ士が、平塚爲廣といふ大將の首を取つた記念に、生首を紋にし、たなどといふ事もありました。源平屋島の戦に那須與一

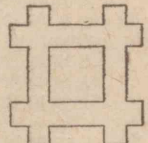
屋島扇



井桁



井筒



藤



が平家の扇を射落した、その晴やかな功名を偲ぶ爲に、其の子孫の中には、日の丸の扇を紋所に用ひて居るものがあるといふ事であります。

第三種は私が指事的紋章と名づけて居るもので、概して苗字に因んだものであります。例へば、吉野といふ苗字の者が櫻の花を紋所にし、堀井、酒井、駒井、井伊、澤井などいふ井の字の附く苗字の者が、井の字、或は井桁、井筒などを用ひる類で、是等は其の紋所を見て、これが何家の紋所かと云ふ事が直ぐに指示されるやうに作られたものであります。近藤、遠藤、伊藤、佐藤、加藤、工藤、内藤といふ苗字の家が、比較的多く藤の紋所を用ひて居るのも、此の種類に屬します。藤の

雲上明覽

雲上明覽大全(二卷)皇室・公家等の世系、氏族、紋所のことなど記述したものである。天保八年(一八三七)作。著者未詳。

杜若



楓



龍膽



紋所については藤原氏から出た家を用ひるといふやうな説もあります。それは誤で、雲上明覽といふ書物に據ると、藤原氏から出た公家が總計九十七軒あつて、その中藤の紋を用ひて居るものが僅か七家だけしかないのを見てわかりません。

第四種は尙美的紋章といふので、これは多くお公家さんの家を用ひられました。お公家さんには家々によつて、衣裳や車などの裝飾に代々極つて用ひられた文様がありました。したが、それを紋所にしたのは是であります。例へば、花山院家の杜若、或は今出川家の楓、久我家の龍膽の如きは、これも車や着物の文様として用ひられたものが、後世紋所が

行はれるやうになつてから、其の方面に轉用されたもの
あります。是等の紋所は、もと單に美しいといふ好みによ
つて用ひ始められたものでありますから、尙美的紋章とい
ふべきもので、それは概して文様から移つて來たものであ
りました。

第五種は信仰の意味から用ひられたもの、即ち信仰的紋
章ともいふべきもので、これには随分澤山の種類がありま
す。例へば戰國時代には、キリスト教が盛に行はれたので、
此の教を信ずる者は、多くクロッスを紋所と致しました。
その一例を挙げると、賤ヶ嶽の前哨戰に於て戰死した中川
清秀は、當時の名高いキリスト教信者でありました。それ



クロッス
十字。
中川清秀
織田信長の臣。天
正十年(三三三)
死、年四十二。
中川クルス

祇園守



角祇園守



アンドリユー
キリスト十二使徒
の一人。

島原の亂

前出。天草の戰。

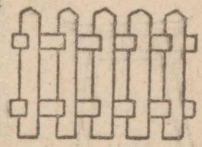
鳥居



故、其の子孫は、今でも「中川クルス」と稱して、バテントクルス
といふものを用ひて居ります。また備前の岡山、因幡の鳥
取、この兩池田家は祇園守といふ紋所を用ひて居りますが、
これはキリスト教のアンドリユーの十字架から出たもの
であります。御承知の如く島原の亂以來、キリスト教は嚴
しい國禁となつて、これを信ずるものは、大名でも、士でも、或
は死刑に處せられ、或は家祿を召上げられると云ふやうな
事になつて、此の教に關係のあるものは、片端からその影を
潜めました。それが、それにも拘らず、戰國時代にキリスト教を信
じた大名の子孫は、大抵此の紋を用ひて居りました。

信仰的紋章の中で、神様に關係のあるものは比較的澤山

瑞籬



御幣



額



瓶子



千木鱉木



あります。例へば鳥居瑞籬欄干御幣額瓶子千木鱉木など
 苟も神社に關係のあるものは悉く紋所となつて居ります
 が、これを見てもさすがに日本は神の國だと思はれます。
 これに反して佛教關係の紋所は多くありませんが、これは
 神道の現世的なるに反して、佛教が超現世的なるに本づく
 のであります。仙石子爵の紋所が「無」の字を用ひて居る
 のは、禪宗の「趙州無字」といふ故事から來たので、少い例の一
 つであります。

第六種に瑞籬の紋章といふのは、家内の延命息災子孫繁
 昌福德圓滿といふ如き、俗にいはゆる縁起よい意義に基づ
 いた紋章であります。例へば、天長・大福・吉利等の文字を家

趙州無字

趙州は趙州從諗禪師の略。支那唐代の有名な禪僧。この趙州と或僧とが狗子に佛性有りや無しやと問答したことを、趙州無字の公案といふ。

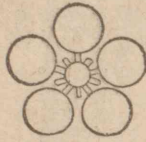
大一大万大吉



菊水



梅鉢



紋としたのは、前に申した指事的紋章とは別で、何れも瑞祥的意義あるものであります。石田氏・山内氏の用ひた大吉大一大萬の文字を集めて作つた紋章の如きは、その適例と見られます。畏くも皇室の御紋章の菊花も、その花が整正優雅である上に、延年の瑞草として重陽の嘉節に用ひられる所に因まれたものであります。楠氏の菊水も菊の下流を汲んで長壽を保つといふ傳説に由つたものであり、其の他鶴も龜も、亦その千年萬年の齡に於て用ひられたもので、この種の紋章もなかく、少くありません。我々の家に紋所があるやうに、神社にも亦社紋と云つて極つて紋所を用ひて居ります。例へば、天滿宮の梅鉢の紋、

諏訪神社
官幣大社。長野縣諏訪郡にある。祭神建御名方富命・八坂刀賣命。



龜甲有字



大國主尊
須佐之男尊六世の孫、醫藥農業の法を創められた神。
杵築
鳥根縣(出雲)簸川郡杵築町。

諏訪神社の桐葉の紋、八幡宮の巴の紋、出雲大社の龜甲に「有」の字の紋の如きが、それでありませう。出雲で「有」といふ字を用ひるのは、社傳に據ると、出雲では、祭神の大國主尊が杵築に鎮座せられたのが十月であつたといふので、此の月を鎮座月と申して居りますが、十月の二字を組合はせると「有」の字になるので、それを神紋に定めたのであると申します。

右申す如く我が國では、家にも神社にも定つた紋章があつて、それに歴史的精神的の重大なる意義があるのでありますから、これを研究して、その由來を明かにするのは、極めて趣味多いことであるのみならず、國史の研究にも必要であり、又修養ある國民の一種の嗜みとしても大切なことであ

山路愛山
名は彌吉、評論家、大正六年歿、年五十四。

赤穂
兵庫縣赤穂郡。城主は淺野内匠頭長矩。

江戸城中の刃傷
元祿十四年三月十四日長矩が吉良義央を江戸城中に傷つけた。

早水藤左衛門
名は滿幾、時に年二十八。

萱野三平
名は重實、時に年二十六。

大石良雄
時に年四十四。

長矩
淺野内匠頭、時に年三十五。

原惣右衛門
名は元辰、時に年五十五。

大石瀨左衛門
名は信清、時に年二十六。

ありませう。

一四 大石良雄

山路 愛山

赤穂の城下は早駕籠の爲に大騒となりぬ。

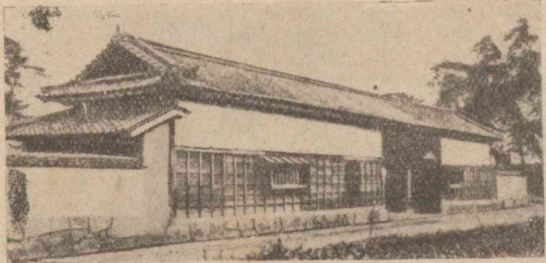
江戸城中刃傷の報藩邸に達するや、早水藤左衛門、萱野三平は直ちに駕籠に乗りて日に行くこと三十里、五日にして赤穂に達し、變を國老大石良雄に報じたり。長矩自盡の命下るや、原惣右衛門、大石瀨左衛門は更に同じ早さを以て赤穂に達したり。

君家事あり衆情恟々、危機は始めて英傑を呼出せり。門閥に於て國中たゞ者なく、而も温厚にして庸愚なるか如

き大石良雄は、こゝに始めて彼の器局を知られたり。晝行燈の綽名を蒙りて、久しく光を頼るも彼は、衆人の驚異する所となりぬ。

赤穂城中の會議は開かれたり。事情は愈明かになりぬ。大野黨と大石黨とは隠然として分れぬ。

大野九郎兵衛は良雄と同じく赤穂の家老にして、長矩に寵用せられ、且年老いて事に慣れしかば、班は良雄の下に在りと雖も、勢力は却つて大なりき。彼は専ら幕府の命に恭順すべきを主張して、成るべく權利に城を



大石良雄舊邸

大野九郎兵衛
名は知房。

長廣
長矩と三歳ちが
ひ。

大垣
今の太垣市。城主
戸田采女正は長矩
母方の従弟。

四月十二日
元祿十四年。

明渡さんことを主張せり。然れども血氣にはやる藩士等は、彼を以て卑劣なり、不忠なりとなし、上使を引受け、城を枕にして潔く討死すべして、説は、聲を均しうして出でたり。まづ主君の弟大學頭長廣をして、主君の後を嗣がしめんことを幕府に請ふべして、議は、良雄に因つて唱へ出されたり。

越えて二日、城中の會議は再び始められり。良雄は前説を繰返せり。大野は異議を述べたり。多くの人々は良雄の説に左袒せり。大垣侯戸田采女正は、大學頭を立てんと請ふことの、却つて幕府の怒を招くに過ぎざるべきを報ぜり。逃亡は始められり。四月十二日大野は遂に遁逃せり。人は

滅ぜり。籠城は終に行ふべからずなれり。
 殉死の議は老人に因つて唱へられ、復讐の議は青年に因つて主張せられたり。良雄は復讐の説を執れり。復讐の説は勝てり。血判に與る者百十餘人中に就いて江戸より來つて難に投ずる者僅かに十八人。
 道路は清潔にせられたり。人民は警められたり。四月十八日赤穂城の上より、受城使の來るは望まれたり。藩士の血は沸けり。良雄は彼等をして極めて靜肅ならしめたり。城中より城外に使者は往返せり。翌日城は難無く明渡されたり。事あるべしと待ち設けたる世人は、赤穂藩士の餘りに溫和なるに驚きたり。

山科
 京都府(山城)宇治郡。京都大津間。

上杉氏
 羽前國米澤侯。吉良家の親戚。

吉良氏
 名は義央、徳川幕府の高家。

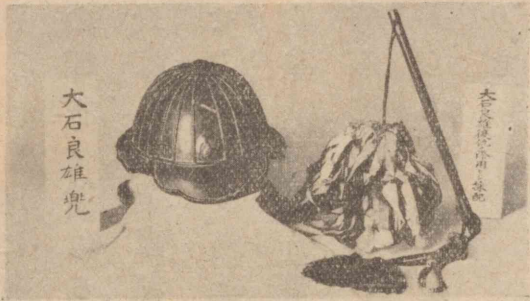
三月十四日
 元祿十五年。前年同日は長矩自刃の日。

良雄は京都の山科に住して、田園を買ひ、居宅を營みて永住を期す。彼はかくの如くして身を、通五達みよとちの地に置き、天下の禰羅みよらを集め、自ら晦まして上杉氏の諜者を欺けるなり。諜者は雙方より出されたり。上杉氏は良雄を京都に偵察せしめ、良雄は吉良氏を江戸に偵察せしめたり。上杉氏は吉良氏を保護することに勉めたり。刺客と間諜とを恐れしが故に、人を遣はして吉良氏の邸を守らしめ、且其の近臣サシヤクの人に非ざれば、婢僕セボクに用ふることも無からしめき。是を以て吉良氏の事情を探るは極めて難かりき。
 年はあつた。暮れぬ。記憶すべき三月十四日は再び來

華岳寺
曹洞宗。淺野家の
菩提寺。

四條河原
京都鴨川の河原、
四條大橋附近の
稱。

吉田兼亮
通稱忠左衛門。一
黨の古老で良雄に
代つて江戸に在る
同志の統領となつ
てゐた。この時年
六十二。



大石良雄の采配と兜

りぬ。赤穂の華岳寺は市民の手向くる香火に煙りぬ。良雄は在京の同志を集めて、先君の忌祭を修めぬ。かくて花は討し、鶯は老いて、四條河原の夕涼に都の群衆雜沓する頃となりぬ。腰拔、賣國奴破廉恥の誹謗は愈、良雄の頭を壓せり。而も彼は情しして聞知せざるものの如し。

と。一縷の望は絶えたり。此の時まで義氣金鐵の如く見えし同盟は、弛み始めたり。眞に復讐の志なく、長廣に因り

妻
名は陸女。
石束氏
陸女の父石束源兵衛、但馬豊岡藩の家老。
良金
通稱主税、この時年十五。
本所の邸
江戸本所松坂町、今の國技館附近。
麻布の別邸
江戸麻布我善坊、今徳川侯邸の一部。

て君家の或は再興せられんことを希望せし人々は、漸く血判を悔い始めたり。或者は音信を絶つに至り、或者は遁逃せり。良雄は盟書を同志に還して、また復讐の念なきを示せり。同志の過半は憤激せり。良雄は是に於て彼等に其の素志を語り。而して最も堅固なる最後の同盟は成れり。此の年五月に至つて、良雄は妻と二人の幼児とを外舅石束氏に託し、獨り長子良金を携へ江戸に向つて發せり。

吉良氏の防衛は猶密なりき。彼は其の本所の邸を以て卑濕なりとし、之を修補するまで、麻布なる上杉氏の別邸に住まへり。これ彼が刺客を避くるの計なりき。同盟は復

池上
今は神奈川県橋樹
郡御幸村に屬し下
平間・上平間の二
字に分れる。

讐に急げり。殊に老いたる人々は餘命の覺束なきを以て、早く事を濟さんと欲せり。或者は寧ろ白晝公然、吉良氏を襲うて一死を賭せんと欲せり。而も良雄は聽かざりき。良雄父子は直ちに江戸に入らざりき。彼等はまづ池上の平間村にありて、吉良氏の動靜を覗ひ、十一月五日に至つて、漸く江戸に入れり。變名して浪人垣見五郎兵衛、同佐内といひぬ。年少なる良金は始めて江戸を見たりしなり。十二月に至つて、吉良氏の邸は成れり。而して夜々怪しげなる青年は之を窺へり。彼等は何處より來り、何處へ去るを知らず。五更に至つて、他の一隊と交代せり。さすがの吉良氏も之に氣付かざりき。しかも間諜、探偵すべて効



—— 赤穂義士の討入 (池上秀敏筆) ——

横川宗利
通稱勘平、この時
年三十六。

泉岳寺
芝高輪車町にあ
る。臨濟宗。

を奏せざりき。

然れども祕密は吉良家に入る茶道より同盟の士横
川宗利トに漏れたり。義央の邸に歸るべき日は明かになれ
り。復讐の日は即ち定まれり。

十二月十四日の朝、良雄は泉岳寺に至りて長矩の墓ヲに謁
し、三百金を寺僧に寄せて去れり。

此の夕、雪雲たり。寒威膚を裂く。

同盟は漸く集まれり。火事装束せる四十七個の人物は、
三隊に分れて吉良氏の邸を三面より圍めり。笛聲は雪夜
の寂寥を破れり。鬨闘の聲は聞えたり。既にして再
び笛は鳴れり。火事装束せる四十七個の人物は吉良邸を

出で去れり。

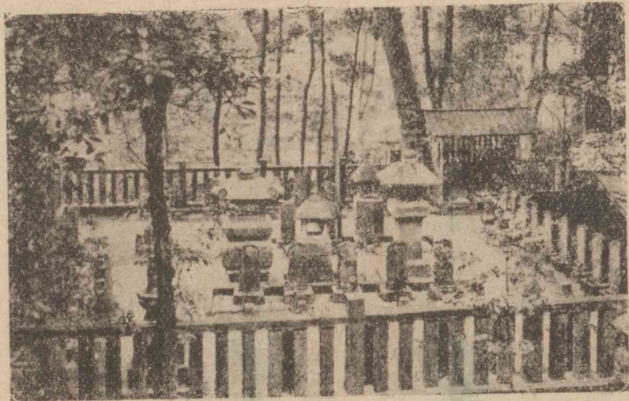
雪霽れて、夜も亦明けぬ。満目白皚々たり。例の如く十五日を祝すべき登城の諸侯と武士とは、城をさして行列を急げり。

忽ち聞く、路人の喧嘩なるを。事實は明かになれり。これ疑もなく赤穂の浪士が吉良氏の邸を襲うて、義央の首を獲たりしなり。

風言は區々たり、飛語は紛々たり。曰く「吉良氏を襲ひしものは、ひとり四十七人に止まらず、此の外にもなほ黒装束をなせる百二三十人ありて、吉良氏の門外を圍みたり。」と。曰く「上杉氏の兵は四十七人を追撃せり。」と。曰く「淺野氏と

上杉氏と相闘はんとす。」と。

富森正因
通稱助右衛門。時
に年三十三。
仙石伯耆守
但馬國出石城主仙
石久尙。



墓の士義七十四

良雄は吉田兼亮富森正因を大目付仙石伯耆守の第に遣りて事實を報ぜしめ、同志相率ゐて泉岳寺に至り、義央の首を長矩の墓に供し、祭文を讀んで其の志を告げ、靜かに官葬を待てり。寺は三斗の酒を置きて臘を勞へり。人あり、曰ふ、「上杉氏の衆至る。」と。良雄は同志を警めて防禦の備を爲せり。而して上杉氏の衆は終に來らざりき。

此の日良雄等は仙石氏の第に招かれ、細川(熊本)、久松(松山)、毛利(長府)、水野(岡崎)の四家に預けられたり。良雄は他の十六人と共に細川氏に、良金は他の九人と共に久松氏に。

元祿十六年二月四日、四十六人は死を賜はれり。

綱利
熊本藩主。忠興四代の孫。

綱利は良雄等に訣別の盃を賜へり。良雄は他の十六人と共に幕府の御前ごまへに自裁せり。

良雄は外濶とくにして、内に枉かまぐべからざる意志を有したりき。彼は何事も打靜めて、騒がしきことを嫌ひたりき。彼は如何なる場合にも、良雄たる品位ひんゐを失墜しだせざりき。然れども、彼は徒に平和を愛するものに非ず。なすべき事は必ずなし、遂げ得べき事ことと堅忍けんじんとを有したりき。彼はス

ストア
古代ギリシヤ哲學の一派。意志の鍛錬を主眼とした。

ストア
古代ギリシヤ哲學の一派。意志の鍛錬を主眼とした。

ストア學者の表面と戰國武士の裏面とを有したりき。彼は愛すべくして狎なるべからず、畏るべくして嫌きらふべからざる人なりき。彼が同盟の首領として成功せし所以のもの、職しやくとして此の品性ありしに由れり。(愛山文集)

往時鹿兒島では、毎年十二月十四日四十七士討入の夜、兵兒仲間が集まつて、赤城義臣傳といふものを讀んだ。一痕の寒月は、庭として半天に在り、吹荒ぶ風は樹梢に咽ぶ。眞に元祿の昔が偲おもばれる。さて時刻が來ると、聲のよい者が上座に控へて讀み始める。他の仲間なかまは、胡坐を組んで、すうりこ前に居並ぶ。腕組うでぐみをするもの、臂を張るもの、兩手を膝について反身はんしんになつて睨にらむるものなど様々である。大高槌おほたかづちを揮つて扉を裂けば、武林

唯七斧を以て樞を折く。時に衆皆一度にぞつと入る。などの處々で、チエス、の聲が四壁を動かす。吉良が突かれて首を取られる一條に至ると、臂を揮ひ聲を勵ましてチエスト、とばかり總立となる。斯くて夜のほのく、と明け初める頃讀み畢る。畢れば一同打連れて山登りをなし、或は遠足を試みるなど、意氣天を衝くの有様であつた。(田中白茅)

一五 討入の模様を報ず

榎本其角

歳尾の御壽として、例年の如く、遠路の處、酒料一封、落鹽漬一桶贈り下され、御厚志の程幾久しく受納致し候。御序に、御家内始め御社中人も宜しく御傳へ下さるべく候。

榎本其角
江戸の俳人。芭蕉門下。寶永四年(三三)七歿、年四十七。

都文公
土屋主税。都文公と號し俳諧を好む。家は江戸本所松阪町吉良義央の邸の隣にあつた。
嵐雪
服部氏。淡路の人。
杉風
俳人。
杉山氏。江戸の俳人。

堀部安兵衛
名は武庸。義士の一人。
大高源吾
名は忠雄。義士の一人。子葉と號して俳句に秀でてゐた。

去る十四日、本所都文公に於て年忘れの興御催し之あり、嵐雪、杉風、吾等も一席にて、折から雪面白く降出し、風情手に取るが如く、庭中の松杉は雪を戴き、雲間の月は闇を照らし、風興今は捨て難くして、夜たゞ更けゆくまゝにはや丑三つの頃、犬さへ吼えず打靜まり、
文料紙も押片寄せ、四五人集りて蒲團をかつき、夢の
世といふ間もあらず、劇しく門を叩く者兩人、玄關に案内し、我等は淺野家の浪人堀部安兵衛、大高源吾にて、今夕御隣家吉良上野介屋敷に押寄せ、亡君年來の遺恨を果さんとて、大石内藏助始め都合四十七人、只今吉良殿を討果さんずるにて候。近隣の御好み武士の

なまき、萬一御加勢も候はば末代の御不覺と存じ候。
願はくは門戸を嚴しく御防ぎ、火の元御用心下され候
はゞ、忝く存じ候と、いひも果さず立出づる、その風情神
妙なる事いふべくもあらず。今は俳友も是迄なりと
て、其角幸に爰にあり、生涯の名残を見んとて、門前に走
り出づれば、各、吉良家に忍び入り候程に、

わが雪と思へばかろし笠の上
と、高々と一聲呼ばはり、門戸を閉ちて内を守り、塀越し
に提燈を立てともし始終を伺ふに、そのあはれさ骨身
にしみ入り、女人の叫び、童子の泣く聲、風颯々と吹き誘
ふ。曉天に至り候へば、本懐已に達したりとて、大石主

税大高源吾、物穩便に謝儀を述べたる事、天晴れ武士の
譽といふべき也。

日の恩やたちまち碎く厚氷
と申捨てたる源吾が精神、猶眼前に忘れ難し。貴公年
來の御入魂故、具さに認め進じ申候。早春の内、彼是御
差繰り御出府候はば、かの落着も承り届け、餘儀なく伏
劔に及び候はば、竊かに追善をも相營み申すべく候。
先は餘日も之なく、書餘貴面の時を期し候。恐々謹言。

十二月二十日

其角

文 璘 様

月雪の中や命の捨てどころ

十二月二十日
元祿十五年。
文璘
梅津半左衛門、秋
田藩の俳人。

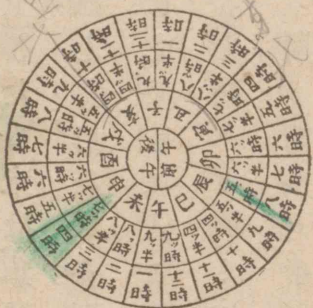
中川霞城
京都の人、名は重
麗、四明とも號す。
文筆家。俳人。大
正六年歿、齡六十
八。

一六 寒稽古

中川霞城

古來右文左武とは云ふもの、封建時代の少年は、主として武藝を講習し、弓馬槍劍砲術調練、實にこれ當時名譽の焦點にて、就中、擊劍は、殆ど學ばざる少年なく、従つて當時最大の勢力を有せり。されば、茲にまづ、其の寒稽古に、幾多の少年が、相競うて場に上りし景況を物語らん。

尋常の日に於ては、大抵始業の時刻を朝五つ時とし、終業の時刻を九つとしたれども、寒稽古と稱するは、多くは曉天七つ時より始め、五つ時に至つて止むを古例とし、三十日乃至五十日の間、氣候の最も酷寒なる時期を以てす。既に其



古今時分圖

の期に近づきて、何日より寒稽古なりとの揭示を見るや、少年は手を拍つて相喜び、一日も缺席すまじと自ら誓ひしは、蓋し他に故あるにあらず。當時人皆信じたり、寒稽古に出精すれば、藝

道は著しく上達するものなり。と。かゝる名譽上の一大刺激あるよりして、彼等は、銳意熱心たゞ、人後に落ちざらんことをこれ思ひ、父母も亦獎勵至らざるなかりしなり。是に於て、彼等は、寢に就くに當つて、稽古道具を取り揃へて之を近く、枕上に置き、父母に向ひて、城鼓四更を報せば、請ふ速かに呼起し給へ。と云ひ、晝の疲に、忽ち熟睡すと雖も、精神充滿

すれば敢て他人に呼起さるゝを俟たず、時刻と思ふ頃には、
獨り自ら眼の開くなり。

夢醒めて、適城頭に聞ゆる鼓聲を數ふれば、正に入つ時な
り。蹶起して衣服を着、破袴を穿ち、走りて裏口に出で、井水
を汲まんとすれば、釣瓶の繩は堅く凍りて、氷針滿つ。之を
握るに、指は忽ち墜つる心地して、覺えず手を叩すと雖も、汲
上げたる水は、蒸發氣濛々として立ち騰り、殆ど湯の如し。
掬して口を嗽き、面を洗へば、湯の如きもの、湯にあらず。既
にして家に入れば、父母も亦夢を醒まして、寒威の骨に徹す
るを顧みず、何くれと世話し給ふは、いと有難き事にぞある。
斯くて、兩刀を帶し、稽古道具を擔ひ、父母に告げて門を出

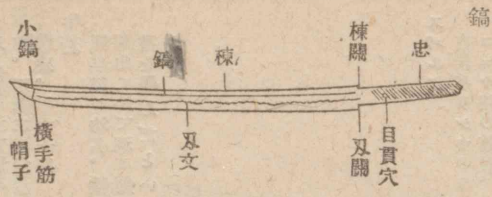
づれば、或は寒月高く、霜氣凜冽たる夜あり、或は北風怒號し
て、野狐の頻りに叫ぶ夜あり、或は冷霧四塞して咫尺を辨ぜ
ざる夜あり、或は積雪深くして、道に迷ふ夜あり。或時は提
灯忽ち消えて、路傍の樹影、大入道かと疑はれ、或時は履聲の
反響、鬼ありて、後へに來るか、と怪しまる。或は詩を朗吟し
て、勇を示し、或は大聲叱咤し、或は刀の欄を握りて、睥睨する
など、若し、傍に人ありて、之を觀たらんには、をかききこと限
なかるべしと雖も、少年の常として、かゝる瞬間には、種々耳
にしたる怪異の譚を憶ひ起し、自ら妄想を畫きて、物凄く思
ふなり。況して、當時狐狸妖怪の事は、社會の勢力ある迷信
なりしをや。武家屋敷の常として、彼處の森の中には老狐

の窟あり、此處の橋の下には古狸の巢ありなど言ひ傳へしなり。されば、少年は、此の如き夜行も、膽力練磨の修行とし、好んで、狸橋狐畔を過ぎ、人に誇る談柄となしたり。亦甚だ愛すべき振舞と謂ふべし。

既にして、師範家もしくは城中の擊劍場に到る。到りて見れば、朋友の既に我に先だちて來れるもあり。又未だ來らざるもあり。中央には高く燈を釣り上げて場中を照し、休憩所には二三の大火鉢あり。或は炭火を以てし、或は焚火を以てし、暖を取るに供せり。三々五々次第に出席の人数を加ふ。皆火鉢の邊に群がりて、或は汗に濡れたる稽古襦袢を乾かし、或は拳に貼せる松脂膏藥を焙り、或は新竹刀

カヨセトモある

を傳へて、輕重を品するあり、古小手の使ひよくて棄て難きを説く者あり。斯くて、各自に衣を着替へ、用意整へば、少年



幕府講武所 徳川幕府の末、旗本の士に武術を講習させた所。



劍 擊

は皆兄弟子の前に出で、一禮して起つて試合を爲す。「や」と呼び、「う」と呼び、「お面、お小手」の聲高く、竹刀相擊ちて憂々と、火花を散らし、鑄を削り、朱胴の丸龍、黒胴

の破軍星、金色と銀色と相映じ、面の紐の赤きあり、白きあり。若し幕府講武所の例を以て之を説かば、白はこれ師範役に、赤はこれ教授方、白と紺との組紐は、これ即ち壯年血氣の

宮本
宮本武藏、播磨の
人、劍客、二刀流の
祖。正保二年(三言
五)歿、年六十四。
牛若
源義經の幼名。鞍
馬山に於て獨り劍
道を學んだとい
ふ。

スバルタ
古代ギリシヤのラ
コニヤ州の首府。
尙武的教育により
市民は専ら武事に
力めた。

世話心得にて、皆名譽多き勳章と謂ふも不可なし。幾番の
試合、幾回の勝負、龍躍り、虎吼え、兩刀を振ふ宮本あれば、小太
刀を執る牛若あり。或は大手をひろげて、むずと組み伏す
るあり、或は足を搦まれつゝ、仰向に倒るゝあり。ほのく
と夜の明くるころには、全身皆汗に染み、喉渴して雪を咬む
あれば、聲を噎らして水を飲むあり。小手短く、臂破れて、紅
血を流すあれば、刀太く、胸を突かれて、紫痕の鮮かなるあり。
こゝに至つて、また寒を覺えず、寒中なほ團扇を揮ふ者あり。
亦壯快ならずや。彼の古スバルタの少年も、若し此の景況
を観ば、或は慚死するならん。

撃劍場に於ける寒稽古の一斑は、略かくの如し。槍術弓

術に於けるも、また相似たるもの多し。要するに、これを今
日の少年が、深奥なる學藝を修め、幽玄なる眞理を講ずる精
神的辛苦の多きに比すべからずと雖も、彼等少年の氣力の
雄壯快活なる、大いに今の少年に勝るものあるのみならず、
長上を敬し、朋友に厚く、信義を重んじ、廉恥の心深かりしは、
時世の然らしめし所とはいへ、今日多く見る能はざる美風
なりき。現代の少年たる者、亦思はざるべからざるなり。

一七 御民われ

御民われ生けるしるしあり天地の

さかゆる時に逢へらく思へば

海大養岡歴
萬葉集の歌人。傳
未詳。

海大養岡歴

八田知紀
鹿兒島の人。歌人。
明治六年(三五三)
歿、年七十五。

筆蹟
名所花 よし野山
かすみの奥はしら
ねどもみゆるかぎ
りはさくら也けり
知紀

平野國臣
福岡の人。元治元
年(三五三)歿、年四
十三。

梅田雲濱
名は源次郎。福井
縣(若狹)小濱の
人。安政五年(三五
〇)歿、年四十四。

幾十度かき濁しても澄みかへるも
水や皇國のすがたなるらむ
八田知紀

よしの山
かすみの奥はしら
ねどもみゆるかぎ
りはさくら也けり

青雲のむかふす極みすめらぎの
みいつかやく御代になしてん
君が代をおもふ心のひとすちに
わが身ありとも思はざりけり
平野國臣
梅田雲濱

加藤千蔭

江戸の人。芳宜園
と號した。歌人。
文化五年(三四六)
歿、年七十四。

橋曙覺

福井の人。井手氏。
歌人。明治元年(二
五〇)歿、年五十七。

小澤蘆庵

尾根に生れ、京都
に住む。歌人。享
和元年(二四二)歿、
年七十九。

筆蹟
かすめる月かける
雲もなくなきたる
空に影みちてゆく
ともみえず霞(むし)
夜の月 蘆庵

千萬のあたに向ひて走り猪の

加藤千蔭

かへりみせぬを心ともがな

橋曙覺

顯はさん御名はかけても及びなし

身の恥をだにのこさずもがな

小澤蘆庵

ちゝはゝの旅なるわれを思ふらん

待つらんさまのおもかけに見ゆ

よしの山
かすみの奥はしら
ねどもみゆるかぎ
りはさくら也けり

松平定信
樂翁と號す。文政十二年(一八三〇)歿、年七十二。

松平定信

田安宗武
徳川三卿の一、田安家の始祖。明和八年(一七六三)歿、年五十七。

田安宗武

本居宣長
伊勢の人。國學者。享和元年(一八〇一)歿、年七十二。

本居宣長

作者不詳
この歌の作者は熊澤蕃山・山鹿素行・山中幸盛等の説があるが確證はない。

作者不詳

埋火ウツヒのあたりのどかにはらからの

まとゐせし夜ぞこひしかりける

ちどりすら友よびかはし遊ぶなり

などてや人のひとりたのしむ

をりくゝに遊ぶ暇はある人の

いとまなしとて書よまぬかな

うき事のなほこの上に積れかし

かぎりある身の力ためさむ

淺草紙

すきがへし紙の一種。反古紙ぼろなどを水にひたし搦き碎いて粘土をまぜてすきあげる。

吉村冬彦

本名寺田寅彦。高知縣の人。物理學者。理學博士。昭和十年歿、年五十八。

一八 淺草紙

吉村冬彦

十二月初めのある日、珍しくよく晴れて、そして風のちつともない午前に、私は病床から這出して、縁側で日向ぼっこをしてゐた。

都會ではめつたに見られぬ強烈な日光のちかに顔に照りつけるのが、少し痛い程であつた。それに、乾してある蒲團からは、ぼか／＼と暖い陽炎が立つてゐるやうであつた。濕つた庭の土からは、かすかに白い霧が立つて、それが僅かな氣紛れな風の戦ぎにあふられて、小さな渦を巻いたりしてゐた。子供等は皆學校へ行つてゐるし、他の家族も何處

で何をしてゐるのか、少しの音もしなかつた。實に靜かな
穩かな朝であつた。

私は無我無心でぼんやりしてゐた。たゞ身體中の毛穴



吉 村 冬 彦

から暖い日光を吸込んで、それが
此のしなびた肉體の中に滲シ込んで
で行くやうな心持をかすかに自
覺してゐるだけであつた。

ふと氣がついて見ると、私のす
ぐ眼の前の縁側の端に一枚の淺草紙が落ちてゐる。それ
はまだ新しい、ちつとも汚れてゐないものであつた。私は、
殆ど無意識にそれを取上げて見てゐる内に、其の紙の上に

現れてゐる色々の斑點が眼につき出した。

紙の色は鈍い鼠色で、丁度子供等の手工に使ふ粘土のや
うな色をしてゐる。片側は滑かであるが、裏側は隨分さら
ざらして、荒筵イシヤのやうな縞目シマメが目立つて見える。併し日光
に透して見てゐると、これとは又獨立な、もつと細かく規則
正しい簾シデのやうな縞目が見える。此の縞は多分紙を漉スく
時に纖維を沈着させるために用ひた簾の痕跡であらうが、
裏側の荒い縞は何だか分らなかつた。

指頭サシユビ大の穴が三つばかりあいて、其の周圍から喰み出し
た纖維が、其の穴を塞がうとして手を延ばしてゐた。

そんな事はどうでもよいが、私の眼についたのは、此の灰

色の四百平方糎ばかりの面積の上に、不規則に散在してゐるさまざまの斑點であつた。

先づ一番に氣の附いたのは赤や青や紫などの美しい色彩を帯びた斑點である。大きいのでせい／＼一糎四方、小さいのは蟲眼鏡でも見なければならぬやうな色紙のきれが漉込まれてゐるのである。それが唯一様な色紙ではなくて、よく見ると、其の上には色々の規則正しい模様や縞や點線が現れてゐる。よく／＼見てゐると、其の中の或物は狀袋のたばを束ねてある帶紙らしかつた。又或物は卷煙草の「朝日」の包紙の一片らしかつた。マッチのペーパーや、廣告のちらし紙や、女の子のおもちやにするおすべ紙

や、あらゆるさういふ色刷のどれかを想ひ出させるやうな片々が見出されて來た。微細な斷片が想像の力で補充されて、頭の中には色々な大きな色彩の模様が現れて來た。普通の白地に黒インキで印刷した文字もあつた。大概やつと一字、せい／＼で二字位しか讀めない。それを拾つて讀んで見ると、例へば「一圓」などはいゝが、盪などといふ妙な文字も現れてゐる。それが何かの意味の深い謎でもあるやうな氣がするのであつた。「蛇かな」といふ新聞の俳句欄の一片らしいのが見つかつた時は、少しをかしくなつて來て、つい獨りで笑つた。

紙片の外に、まださまざまの物の破片がくつつついて居た。

木綿絲の結び玉や、毛髮モウヘツや、動物の毛らしいものや、ボール紙のかけらや、鉛筆の削り屑、マッチ箱の破片、こんなものは容易に認められるが、中にはどうしても來歴の分らない不思議な物件の斷片があつた。それから或植物の枯れた外皮と思はれるのがあつて、其の植物が何だといふことが、どうしても思ひ出せなかつたりした。

此等の小片は動植物界のものばかりでなく、礦物界からのものもあつた。斜に日光にすかして見ると、雲母の小片が銀色の鱗のやうにきら／＼光つてゐた。

段々見て行く中に、此の澤山な物のかけらの歴史が可なり面白いもののやうに思はれて來た。何の關係もない

色々の工場で製造された種々の物品が、さまざまの道を通つて、或家の紙屑籠で一度集合した後に、又他の家から來た紙屑と混合して、製紙場の槽から流れ出すまでの徑路に、どれ程の複雑な世相が纏綿マニマニしてゐたか。かう一枚の淺草紙になつてしまつた今では、再びそれをたどつて見やうはなかつた。私は唯漠然と、日常の世界に張渡された因果の網目の、限もない複雑さを思ひ浮べるに過ぎなかつた。

あらゆる方面から來る材料が一つの釜で混ぜられ、こなされて、それから又新しい一つのもものが生れるといふ過程は、人間の精神界の製作品にも、それに類似した過程のある事を聯想させない譯にはゆかなかつた。

エマーソン
米國の思想家、詩人。(西曆一八〇三—一八六二)
シエクスピヤ
英國の大戯曲家、詩人。(西曆一五六〇—一六一六)

モンテニユ
佛國の思想家。(西曆一五三二—一五九〇)

そのやうな聯想から、私はふとエマーソンが「シエクスピヤ論の初めに書いてある言葉を思ひ出した。」「價值のある獨創は他人に似ないといふ事ではない。」「最も大いなる天才は最も負債の多い人である。」「こんな意味の言葉が思ひ出された。

それから又或盲目の學者が、モンテニユの研究をする爲に採つた綿密な調査の方法を思ひ出した。彼はモンテニユの論文を悉く點字に寫し取つた中から、あらゆる思想や、警句や、特徴や、挿話を書抜き、分類し、整理した後、更に此の著者が讀んだであらうと思はれるあらゆる書物を讀んだり、讀んで貰つたりして、其の中に見出される典據や類

型を拾ひ出したといふ。私は此の盲人の根氣と熱心とに感心すると同時に、其の仕事がどことなく、私が今紙面の斑点を搜しては其の出所を詮索した事に似通つてゐるやうな氣もした。どんな偉大な作家の傑作でも、寧ろさういふ人の作ほど豊富な文獻上の材料が混入してゐるのは當然な事であつた。それを穿鑿するのは興味もあり有益な事でもあるが、それは作と作家との價值を否定する材料にはならなかつた。要は資料がどれだけよくこなされてゐるか、不淨なものがどれだけ洗はれてゐるかにあつた。魔術師でないかぎり何もない眞空から假令一片の淺草紙でも創造する事は出來さうに思はれない。しかし紙の

橋南谿

江戸時代の醫師、國學者。本名は宮川春暉。伊勢の人。文化二年(三四五)歿、年五十三。

藤樹先生

中江藤樹。近江の人、名は原、藤樹と號す。世に近江聖人といふ。慶安元年(三〇〇)歿、年四十一。

大溝

小川村と共に湖西の高島郡にある。

分部侯

大溝藩主分部氏、領地二萬石。

王陽明

明の大儒で陽明學を開いた。

材料をもつと精選し、もつとよくこなし、もう一層よく洗濯して、純白な平滑な光澤があつて堅實な紙に仕上げる事は出来る筈である。マツチのペーパーや活字の斷片が其のまゝ、眼につく内は、まだ改良の餘地がある。(冬彦集)

一九 藤樹書院

橋 南 谿

藤樹先生は俗稱中江與右衛門といひて、江州大溝の在り、小川村の産にて分部侯の領地の百姓なり。王陽明流の學者なりしが、其の德行近時の學者の及ぶ所にあらずと思はる。

先年余聞きし事あり。尾州の一士人、用事ありて此の邊

を過ぎ、先生の墓所小川村にありと聞きて、畑うつ農夫に尋ねしに、畑道なれば知れ申すまじ、案内して參らせん。とて、先に立ちて行く。程なく小さき藁屋に至り、暫し待たせ給へ。とて、内に入る。

やがて出づるを見るに、木綿の新しきひとへ物に羽織の小



湖西地方

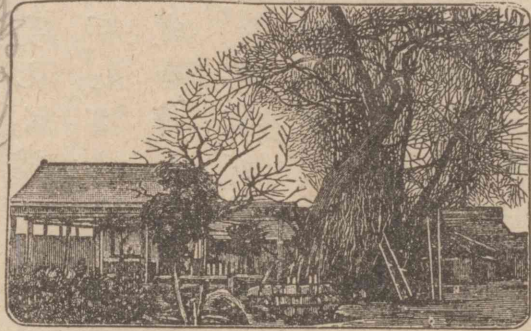
紋の羽織を着たり。彼の士人驚きて、さて、丁寧なる男かな。墓だに教へ得さすれば満足なるに、と思ひもて行くうち、墓所に至りぬ。彼の農夫竹垣の戸を開き、いざ入りて

拜し給へ。」といひて、其の身は戶外に拜伏せり。士人大いに驚き、さては衣服を改め着しは、我がためにはあらで、先生を敬するにてありけりと心づき、さても汝は藤樹の家來筋の者にてやある。と問へば、さには候はず、されど此の村の者は、一人として先生の大恩を蒙らざるは無し。「親を敬ひ子を親しむ事を辨へ知りたるは、先生の御蔭なれば、必ずおろそかに思ふべからず」と、我が父母も常々をしへ候ひぬ」と語る。士人も始は只なほさりに一見の心にて來りしが、此の農夫の様子を見聞きするに、今更に心も改り、懇ろに拜して歸りぬとなり。

此の事耳に残りあれば、此の度よき序なれば、墓にも謁し、

講堂をも一見せばやと思ひて、大溝の東の加茂といふ所より、南へ入ること八町にして小川村に至る。農夫老婆までも、委しく道を教へ、迷ふことなくて講堂の前に出でたり。雨戸とさしあれば、其の隣志村某といふ醫者の許を尋ねて、講堂を拜したき由いひ入るゝに、まづ玄關へ上り給へ。」といふ。「草鞋がけなれば、只かりそめに講堂の案内を。」といへど、強ひて足をささの水など持ち來るまゝ、やむことを得ず、草鞋脚絆など解きて玄關へ上るに、某出で迎ふ。余、講堂を拜見し、神主をも拜したき由乞へば、某奥に入り、禮服を着して、講堂の鍵を手に持ち、いざ來り給へ。」と引き連れて行く。さて講堂を開きたるに、堂は茅葺にて間數四間あり。書

朱熹
南宋の大儒。朱子
學を開く。白鹿洞
書院を今の江西省
内に興し、學規を
作つた。



院書樹藤

院は南面にて十五疊講場なり。其の次は對客の間、八疊に
床あり。其の次は十疊、其の次は臺
所なり。正面縁側の上に「藤樹書院」
といふ四字の額あり、分部昌命拜書
とあり。十疊敷の間に、朱熹の白鹿
洞の規則を板に書いてかけたり。
さばかり相違の學風なるに、此の文
をかけたられたるも殊勝に覺ゆ。押
入の内に、深衣を着せる繪像あり、釋
菜の時の圖なりと云ふ。其の前に匾あり、其の内に神主
あり。上箱に「先生姓中江、諱原、字惟命、號顧軒、稱藤樹先生、慶

孔子のまゝ

大洲
藩主加藤氏、領地
五萬石。



中江藤樹

安元年戊子八月二十五日卒。葬邑東北玉林寺。この三十八字あ
り。箱の内の神主、常法の如し。
それより先生の出處を尋ぬるに、先生三十餘にて、伊豫の
大洲侯の招に應ぜらる。先生の老母
船をきらひ、四國に渡り得ず、江州に残
り、て先生を愛し慕はる。故、やむこ
とを得ず、強ひて官祿を辭し、暇を願は
れしに、侯惜しみて許さざれば、願既に
三度に及びて後、願書を出し捨てにして、大洲を忍び出でて
歸り去れり。元孝心より出でたる事ゆゑ、侯も暇を賜はり
ぬ。それより江州に歸り、老母を養はれしなり。其の後諸

備前
備前岡山藩主池田
光政をいふ。
熊澤
熊澤蕃山。後に見
える。

侯より招ありしかど、再び仕へられず。備前の招にも門人の熊澤を出され、幾程なくて死去あり。わづかに四十一歳なり。此の講堂の建ちしも、死去二三年前の事なり。先生本字のまゝの嫡子本字のまゝ徳右衛門、常省先生と稱す。多病なりしかど、年壽は七十二歳まで保てり。其の人、子なくして、藤樹先生の子孫絶えたりき。對馬の家中に兄弟の家ありて、今に中江を名乗るとの噂なり。と某語れり。されども、其の餘教近郷に深く染み入りて、殊更この小川村の百姓は、年若き者といへども、毎夜集會して手習し、かりそめにも酒など打飲み、亂舞音曲などすることなく、まして博奕などはいふまでもなし。誠に此の邊の風儀、溫和淳朴にして、見る所聞く所感に堪へず。風習が溫和でオホぼほと食ひてゐる。

熊澤先生
熊澤蕃山。名は伯
繼、京都の人。備
前侯池田光政に事
へて其政に任ず。
元祿四年(三五〇)
歿、年七十三。
河原市
高島郡にある。
榎木
滋賀郡にある。

有難き事どもなり。前の尾張の物語相違なき事を知る。熊澤先生は其の門人なり。此の人藤樹先生に従はれし始を尋ぬるに、其の頃加賀の飛脚、金子二百兩を預り持ちて京へ登るに、江州河原市より輕尻江州河原市よりの馬をやとひ、榎木の宿に泊る。馬方は河原市へ歸り、馬を洗はんと鞍を解きしに、鞍の下より財布一つ出でたり。取上げて見れば金二百兩あり。馬方大いに驚き、今の飛脚の取り忘れたるにこそと思へば、其の儘榎木に走り行き、飛脚の泊れる宿に至り、對面して委しく尋ね問ふに、相違なければ、其の金を取出して返しけるに、飛脚は死にたる者の蘇りたる心地して、悦びのあまり、行李より別の金子十五兩を取出して、馬方に與へ、もし此

一歩二兩
四分

の二百兩なくば、我が一命を失ふのみならず、親兄弟までも重き罪に至らん。されば、その高恩なく、言葉のいひ盡すべきにあらねども、先づ當座の御禮までに贈り奉る。」と、



熊 澤 山

涙を流して悦ぶに、馬方大いに驚きし顔色にて、そなたの金をそなたに取納め給ふに、何の禮いふ事あるべき。」とて、手にだに取らず。

して歸らんとする故、やむことを得ず、十兩とへらし、五兩となし、三兩となし、段々とへらして、終には金二歩となし、せめて是ばかりは我が心の悦びなれば、受け給ふべし。さなく

鳥目二百文
ある金

ては我が心もすみ申さず、今宵もいねがたし。」と、理を盡し詞を盡していふにぞ、此の金を受け申す程ならば、二百兩をも留め置き申すべし。かく返し申すからには、聊かにても謝禮を受くるは、我が心にあらず。さりとして餘儀なくのたまへば、さらば鳥目二百文をたまはるべし。是は今夜やすむべき所を是まで追ひかけ來れる賃金なり。是は我が取るべき錢なれば、申し請くべし。」といひて、二百文を受けて歸らんとす。

飛脚も感に堪へかね、さるにても、そこは、いかなる人にておはす。」と問ふに、名ある者にあらず、又何一つ知れる者にあらず。只我が在所の近所に小川村といふ所あり。此の村

に與右衛門といふ人おはして、夜ごとに講釋といふことあり。某も折ふし行きて聞き侍りしに、「親には孝を盡すべし。主人は大切にするものなり。人の物は取らぬものなり。無理非道は行ふべからず。」などいふ事、常々語り給ふにより、今日の金子も我が物にあらざれば、取るべき理なしと心得しまでの事なり。」といひて歸りぬ。

飛脚はそれより京へのぼり、いつもの宿に到り、さても此の度は辛き命生きのびて、おのゝ方にも對面すること、なりぬ。」とて、有りし次第をくはしく語るに、折節其の家の裏に熊澤治郎八、田舎よりのぼり居て、學問修行最中の事なりしが、此の物語を聞きて、その人こそ誠の儒といふものなれ。」

熊澤治郎八
蕃山の通稱。

飛脚を馬
かゝる人夫。牛
紙を毛着

とて、其の翌日すぐに江州に到り、小川村を尋ねて隨從を願はれしに、「人に教へ申すべき程の學徳なし。」とて、更に隨從を許し給はず。熊澤ひたすらに願ひて、二日が間藤樹の門にたゞずみて歸らず。藤樹の老母、これを氣の毒がり、よき先づ内へ入れ申せよ。」とありし故辭みがたくて内へ入れ、遂に師弟の約をせられし由なり。その後藤樹を備前より招き給ひしに、其の身は病身なりとて堅く辭し、門人熊澤といふ者あり、御役にも立つべき者なり。」とて、熊澤を出されけり。何れも格別の事ともなり。長物語なれど、藤樹先生の事跡委しく知らぬ人も多ければ、見聞き及ぶ所を書付けぬ。江州に遊ぶ人は、必ず彼の講堂を見るべき事なり。（東遊記）

村井弦齋

名は寛。愛知縣の人。小説家。昭和二年没。年六十五。

滋賀の山

滋賀縣(近江)滋賀郡滋賀村の山。北は比叡山から南は長良山・逢坂山に連る。

辛崎

滋賀郡下坂本村の大字。辛崎の松は八景の一。

堅田

同郡にある。堅田の落雁は八景の一。

比良

同郡木戸小松二村の西の山。比良の暮雪は八景の一。

坂本

滋賀郡に在る。今坂本村と下坂本村とに分れる。

二〇 滋賀の山越

村井弦齋

雪ならば幾たび袖を拂はまし、花の吹雪の滋賀の山越。それは彌生の春の頃、櫻狩して行く道の眺も飽かぬ旅なれども、これは習はぬ冬の旅、花の吹雪のそれならで、霏々たる雪は路を没し、凜冽たる風は膚を裂く。辛苦のうちに滋賀の山を打越ゆれば、滿目蕭條たる湖上の風景。辛崎の松は暮靄朦朧の間にかくれて、堅田に落つる雁の聲のみ寒く鳴きわたる。

見渡せば、白雪皚々たる比良の峰、今より此の山路にかゝらば、山中にて日は暮れん。疲れし足の進み難きに、坂本の邊りにて宿りを求めんかと、獨旅の少年は前路を睨んで暫く湖畔に立ちたりしが、やゝありて思ひ返し、彼の山を越ゆれば我が故郷、今一息にて母君の許に着くなるに、何とて空しく此所に留らん。夜にてもあれ、朝にてもあれ、家に歸らば疲も厭はじ。いで、心を取直して、今宵の中に此の山を越えんものをと、再び足を踏みしめて、薄暗き山路へこそは掛りけれ。

痛はしや藤太郎、母に逢ひたき一心より、踏みも習はぬ山路を、杖に縋りて只一人、辿り辿りて行く道の、岩に躓き、木の根に倒れ、血さへ足より流れ出でて、道の邊の雪を紅に染めながら、猶も心を勵まして、風雪の中を登り行く。曉て日は

我が故郷
高島郡小川村。

暮れたり。闇の夜ながら雪明りに路は見ゆれど、彌増す寒さは骨に徹りて手も足も凍らんばかり。寂莫たる満山。耳に答ふるものとは、閉ぢし氷の下くゝる、細谷川の水の



雪の中 藤太郎

て、恐ろしとも悲しとも譬へん様なし。斯かる難所と知りもせば、麓にて一夜を明かし、ものを旅馴れぬ身の悲しさに、足に任せて此の深山路へ掛りしが、今は足疲れ身體凍りて、先へも出でられず、後へも戻られず。少年は進退

音杉の枯葉を鳴らす風、或は積雪梢を壓して、枝折れ雪の落つる響など、かすかに物凄く聞え

て、半ば死せるものゝ如く、松の根方に打倒れたり。其儘息を休らひて起きも上らず、降る雪を恨めしげに眺めてありけるが、腹は次第に饑を感じて、寒さは一入身に沁みわたり、眠るともなく死ぬともなく、前後も知らずなりにけり。懐かしの故郷や、藤太郎は昔覚えし山川草木を眼の前に見て、忽ち足の疲れ打忘れ、路を急ぎて我が家の方へ向ひけり。夜は漸く明けたれども、雪天の寒さに閉ぢられてや、道の家はまだ多く起き出でず。彼の家は我が友の家なりけり。此の家には我に優しき老人ありきなどと、昔の事を想ひ出て、そゝるにあはれを催しつゝ、しばらくにして我が家の前に來れり。

見れば、**御門**舊に依つて立ちたれども、半ば雨に朽ちてま
た昔日の觀に非ず。柱も傾ける所あり、**築地**も崩れたる所
あり。前庭の古松、刈る人無ければ枝繁り、**修竹一叢**、雪に堪
へざる風情あり。玄關の戸は未だ開かず。母人は未だ起
き出で給はぬにやあらんと、築地の陰より内に入つて、**勝手**
の方を見れば、車井の軋る音、さも寒げに聞えて、何人か水を
汲めり。姿は確かに母なる人、少年は忽ち胸ふさがりぬ。
昔はあまたの男女を召使ひて、勝手などに出でられしこと
なき母様が、此の雪の朝の寒天に、自ら車井の水を汲み給ふ
か、情なしと、沸き出づる涙禁めあへず。急ぎ車井の側に駈
け行きて、後より其の袂を**惹き**、母様、私が汲みませう。」と涙な

がらに取りすがる。

事の不意なるより、母なる人は驚きて振返り、「誰ぢや。お
や、藤太郎か、どうして此處へ。」藤太郎は細き聲、「はい、母様の
御手助けを致しに参りました。お話は後で申上げますか
ら、先づお家へお入り遊ばせ、あれ、お頭髪へ雪が掛ります。」と
孝子の眞情、片時も母を此の雪中に立たしめざらんとす。
母は車井の綱を確と握りしまゝ、石の如く立ち居りて、「叔父
様とでも御一所か。」いゝえ、一人で御座います。」母は聲を
勵まし、「叔父様が一人そなたをお出しなされたか。」いゝえ、
叔父様には知らせずに参りました。」母は眉を揚げ、「怪しか
りません。なぜそんな事を。」颯と吹來る朝嵐に、地上の雪

はくるくくと捲き上げられて、横に二人の顔を撲つ。母は
 きつとして動かず。藤太郎は何事か言はんとして、顔を揚
 げしが、ふと母の足を眺めて、「おや御足が切れて血が——お
 お、これこそ鞆あかぎれで御座いますか。」と俄かに斷腸。母の疵を見
 るは、我が身の背に白刃を加へらるゝよりも、痛はしき心地
 して、忽ち懷中より、かの靈藥を取出し、「母様、これをつけて御
 覽遊ばせ。」と足許に進み寄る。母は急に足を引きて怒の聲、
 「足なぞは、どうでもよい。なぜそなたが歸つたか、その譯を
 お話しなさい。」藤太郎は、取付くすべもなし。「然らば、家へ
 入りまして申上げます。」母は頭を振り、「いゝえ、此處で聞き
 ませう。聞かない内は滅多に家へ入れません。」

ありし次第
 藤太郎は母が水仕
 事の爲にあかぎれ
 が切れて苦しんで
 る事を聞いて痛
 はしきに堪へず大
 洲の北方新谷村に
 往つて妙藥を手
 入れ其儘無斷で故
 郷に向つたのであ
 る。

藤太郎はありし次第を物語りぬ。母なる人は我が子の
 やさしき心に惹き入れられて、共に涙に咽びしが、忽ち思ひ
 返しけん、わざと聲を勵まして、「これ藤太郎、そなたは此の母
 の言葉を忘れましたか。そなたを叔父様に頼む時、一旦國
 を出たからは、天晴れ立派な人にならぬ内は、決して途中で
 歸るなど、あれほど堅く言ひ聞かせた事を忘れましたか。
 此の母が難儀を忍ぶのも、唯そなたを立派な者にしたいば
 かり。立派な者にもならないで、家に居て手助を仕てくれ
 たとして、決して嬉しくありません。これまでも一人で來た
 ものなら、一人で歸れぬ事はあるまい。母は再び逢ひませ
 ぬから、其の足で直ぐ大洲までお歸りなさい。」

大洲
 愛媛縣喜多郡大洲
 町。

餘りの事に、藤太郎は默然として言葉も出でず、氣にも心にも力抜けて雪の上に跪きぬ。母は其の失望せる様子を見て、痛はしき哀れき胸に満ち、斯くまで我が身を思うて來りしものを、百里の道の一人旅、定めて憂き事も辛き事も多かりしならん。せめて一日なりとも家に入れて、旅の疲を休めさせんかと、恩愛の情に心も亂れんとするを、忽ちにしておぼしめし直し、**弱き心を見せなば修業の邪魔**、獅子は子を千仞の谷に落すと聞くものを。「藤太郎、そなたは母の言ふ事が分りませぬか。」と強くは叱れど聲は沾みぬ。藤太郎は落つる涙を拭ひつゝ、頭を垂れしまゝ、かすかなる聲にて、「はい、分りました。」それならば今から歸りますか。」

藤太郎は悲しき聲にて、「はい、歸ります。」と、**素直に**言ふ。素直に答へられては、なほさら腸のしぼらるゝ。母は遂に堪へ兼ねて忍び泣き、袖かみしめて聲を飲む。

藤太郎は屹として立上れり。「母様、此の薬は鞍の妙薬で、世に得難き品、これを差上げたいと、わざ／＼持つて参りましたもの故、どうぞこれだけはお取りなされて下さい。」と、**新谷**にて得し妙薬を母の前に出す。母は快く、「おゝ、そなたの志、これだけは受けませう。」と手に取らんとて下を向く。藤太郎は渡さんとして上を向く。見合はす顔、互の眼には涙一杯。

母は恥かしと、ちつと耐ふる心の苦しき。子は堪へざり

新谷
大洲の北約八軒。

けん、藥を手より取落して下を向く。雪の上にほろ／＼と降ちたる一雫。

雪はなほ霏々として寒風に飛べり。母が汲み置きし水を見れば、いつの間に張りけん、上は一面の氷となれり。斯る寒さに母様がと思へば藤太郎は、立ちも遣られず。藤太郎は遂に心を勵まして、泣く／＼我が家を立出でたり。見送る母、見返る子。満天の風雪路悠々。(近江聖人)

二一 漢字の構成

昔支那に蒼頡さいけつといふ人があつて、鳥や獸の足跡を見てから思付き、色々の畫を書いて文字を作つたと言傳へられて

蒼頡
黃帝の臣。

ゐる。漢字が畫から出來たといふことは、一見しては分らぬが、注意して見ると成程とうなづかれる。例へば日が☉、月が☾、山がⓂ、川が川、木が木、竹が竹、弓が弓、矢が矢、鳥が鳥、魚が魚から出來たといふやうなのがそれである。ところで鼠の字になるとちよつと難しい。鼠は物を齧るから口と齒、走るに早いから足、それと長い尾、この三特徴を合せて鼠とした。人の指と腕とを象つた手から手又は才が出來、この手で物をつかむ形の爪から爪の字が出來た。瓜は蔓に「うり」の生つた形の瓜から出來た字。故に爪にツメなく瓜にツメがあるのである。門が門となり、この門の左半分が戸の字となる。それは木を半分に裂いて、右半分が片即ち

片の字となると同じ理である。斯様に物の形を象つて作つたのを象形文字といふ。

形のある物は形を象ればよいが、無形の道理や事柄は上述の象形文字を本として、之に符號をつけたり、又は之を變化して文字を作つた。例へば水平線の一を引いて、その上や下に・又は―をつけて、上又は上として、「うへ」下につけて「下」又は下として「した」の意ときめる。木の「も」と一を引いて本「すゑ」に引いて末とし、月が半ば山の端に昇つた頃が「ゆうべ」であるといふ意から、月を半分書いて夕とする、或は又「からす」は色が黒く、遠見では目の有無がわからぬ鳥だといふので、鳥の字の目を除いて鳥と書くといふ風に、理窟

をつけて、其の事柄を指し示すから、此等の字を指事文字といふ。此の象形と指事との二種が漢字のアルハベツトとなつて、更に數萬の字が組立てられるのである。

象形指示の二法によつて作られた所謂アルハベツトの組合せ方に、又二種ある。第一は、

炎 ほのほ 赫 かがやく 林 はやし 晶 あきま 轟 とどろく

といふ風に、同じ字を二つ以上組合せたり、又一を地平線と見て、この上に日を書いて旦とし、その日が次第に昇つて木にかゝつたのを東とする。口と鳥とを合せて鳴、牛と角と刀とで解剖の解の字とする。此のやうに二つ又は二つ以上の文字の意味と意味とを會せて造つた文字を會意文字

る。之を轉注法といふ。金といふ字を貨幣黄金堅固武器などの義に用ひ、首の字をかみをさはじめまうす等の意味に用ひるのがそれである。此の外に今一つ地名や人名や其他のものに、之と同音の漢字を勝手に借りて来て用ひる法がある。例へばドイツイタリ・ロンドン・ナポレオン・シヤカキリストといふのに、獨逸伊太利倫敦奈破烈翁釋迦基督と書く類である。此等の漢字は假りにその音にあてはめて用ひるものであるから之を假借法といふ。

以上六種の中で象形指事會意形聲の四種は、文字作製の原理を説き、轉注假借の二法は前の四種によつて作られた文字の流用法を説いたものである。そして此の六種を總

稱して漢字の六書といふ。

二二 進 學

室 鳩 巢

室鳩巢 名は直清、江戸の人、儒者。初め加賀侯に仕へ、後徳川吉宗の侍講となる。享保十九年(一七四八)歿、年七十七。



室 鳩 巢

諸君の如きは、春秋に富み、材力に足る。若し懈らずして日に學に進まば、何ぞ古人に及ばざるべき。然れども歲月は恃むに足らず、材力は多とするに足らず、たゞ孳々汲々として勉めて息まざるにありぬべし。若し悠々として日を涉り、一旦年老い齡傾きて後、日頃の懈を思ひ出でて、いかに悔ゆとも、何の益かあるべき。即ち今翁が身の

少壯不努力
文選にある長歌行
の詩句。
陶淵明
名は潛、晋の詩人。
(三六五―四二七)

上にて候。されば古詩にも、
少壯不努力。老大徒傷悲。
といひ、陶淵明も、



朱 熹

盛年不重來。一日難再晨。
及時當勉勵。歲月不待人。
といへば、古人も此の感懷を同じう
せりとぞ見えし。此等の詩句、時々
吟詠して勇進の氣を振ひ起すべし。

又世に傳ふる朱文公の勸學の文に、

勿謂今日不學而有來日。勿謂今年不學而有來年。日月逝矣。歲不我延。嗚呼老矣。是誰之愆。

朱文公
朱熹、宋の大儒、
文公と諡す。(一一
三〇―一二〇〇)

陶侃
晋の武將。陶淵明
の曾祖父。(二五九
―三三四)

言簡にして意も明白なり。をりふし打ち誦じて自ら警む
るによかるべし。それよりも翁が常に愛するは陶侃が語
なり。

大禹、聖人。乃惜寸陰。至於衆人。當惜分陰。豈可佚遊荒廢。生
無益於時。死無聞於後。是自棄也。

といへるこそ學者志を立つる法とすべきなれ。前にいふ
淵明が詩も、曩祖以來の家法にこそと思ひ侍り。凡そ人と
生れて學に志ありといふきはの、生きて時に益なく、死して
後に聞ゆることなく、草木と同じく朽ち果てば、いと口惜し
かるべきことなり。されば諸君も此の陶侃が語をもて自
ら激昂して、日夜勤勉せらるべし。

紹鷗

武野仲村。織田信長
の茶道の師。弘治元年(三三五)歿、
年五十三。

利休

千宗易。豊臣秀吉
の茶道の師。天正十九年(二五九)
歿、七十一。

但し學は勇進を喜ぶといへども、また急迫なるを嫌ひ侍り。とかく一生こゝを離れぬことにて候へば、急迫にして求むべきにあらず。たゞ懈惰を戒めて、常に聖賢の書に優游涵泳せられれば、久しうして自ら進益あるべし。翁、昔加賀にありしとき、士族の中に紹鷗利休が風流を慕つて、茶湯を好む者あり。江戸へ行役の時、道中茶具を持して、逆旅にても釜をかけ、炭をおきて樂みとしけるを、同行の人見て、いかによければとて、道中にてはやめよかし。といへば、その人いふは、道中とて一生の外にあらばこそ。これも一生の日數の内なれば、わが茶湯をする日にあらずといふことなし。家にあると何ぞ異ならん。とて、その後もやめざりき。學者の

道に志すも、此の人の茶湯を好むが如くなるべし。(駿臺雜話)

二三 道話二篇

柴田鳩翁

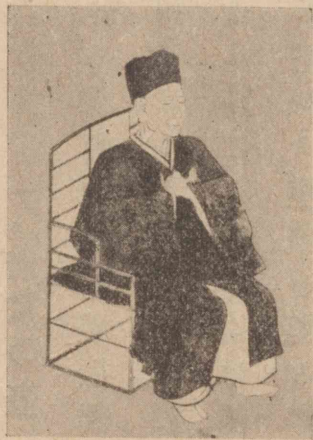
一 南京の壺

さる御町内に婚禮振舞がござりました。お年寄をはじめ、町役の人々、一同に座に就きますると、さまざまの馳走がある。時に、かの年寄は酒と聞いては笹の露にも酔ふ程の下戸ぢや。座中を廻る杯の間、退屈さうにしてゐられると、亭主方が氣の毒に思ひ、お年寄様は御酒は召しあがらず、御退屈にござりませう。ちと、御菓子なりとも御取りくだされい。と、南京の古染附けの壺に大りんの金米糖を入れて年

柴田鳩翁
名は亭。通稱謙藏。
京都の人。心學者。
天保十年(四九九)
歿、年五十七。

お年寄
町年寄。名主を管
理する。
町役
町役人のこと。名
主、五人組など。

寄の前へ持つて来る。座中もこれは好いお心附、ひらにお菓子を召しあがられい。」とすゝめる。年寄もわるうはなし、「然らば頂戴を致しませう。」と、壺をひきあげ、手首を突込みし



柴田鳩翁

なに少しきしむやうに覺えたが、無理に手を差入れて撮み出さうとするに、手首がつまつて抜けませぬ。どうぞして抜けるかと、色々にこじまはして見ても、ひつばつて見ても抜けず、まご／＼して居らるゝと、傍から見つけて、「どうなされましたぞ。」いや手が少しつまりまして思ふ様に抜けませぬ。」と眞顔になつていはるゝ。「そ

景清
平氏の侍大將、惡七兵衛景清。
美保谷
源氏の士、美保谷十郎國俊。

司馬溫公
名は光、宋代の大儒（二九一—一〇六）

れは氣の毒。私が壺を持つて居りませう。無理無體に手をお引きなされ。」と、一人が向うへまはつて壺をつかまへ、あとへ引くと、年寄は手を前へ引く。互にえいやと引合ふ有様、景清と美保谷が鍾曳をするやうなと、座中が一同にどつと笑へど、年寄はなかく、笑はず、泣顔になつて、「どうも痛んで抜けませぬ。」といふ。さあ、これから大騒になり、醫者どのを呼んで來い。接骨ではいくまいか。」と酒宴の興も醒めはてました。

時に五人組が一人進み出て、「いづれもお騒ぎなされな。我等承つたことがある。昔、司馬溫公といふ人、幼きとき、大勢の子供と共に大きな壺のほとりに遊びましたが、一人

の子供、過つてかの壺の中へはまりました。大勢の子供はこれを見て逃歸つたが、司馬溫公一人は歸らず、傍なる手頃の石を取つて、かの壺へ投附けましたれば、壺は割れて、はまつた子供は不思議に命を助かりました。或人の話ぢや。今お年寄の御難澁は、この話によく似てある。いざや、我等が司馬溫公となつて、たとへばその古染附けの壺が、失禮ながら何程高金の品でも、お年寄の腕には換へられぬ」と、しかつべらしく煙管を提げ、向うへ廻れば、年寄は氣の毒さうに、壺をかぶつた手を突出すと、只一打に打碎いた。何が、座中は金米糖が散らかつて雪を降らしたやうになると、やれ、お年寄お助かりなされたか。」と其の手を見れば、抜けぬこそ道理なれ、金米糖を一杯つかんで居られたと申すことぢや。



心學道話

何とをかしい話ではござりませぬか。つかんだものを放しさへすれば自由自在に手は抜けたものを、一度つかんだら首がちぎれても離すまいと片意地なうまれつき、それで自由自在の大安樂が出来ぬのぢや。かく申せば金銭の事のやうなれどつかむものはこればかりではない。腕前のあるのをつかみ、

賢いをつかみ、負けをしみをつかみ、家柄をつかみ、身代のよいのをつかんで離すまいとかつき歩くによつて、教を聞く事もならず、樂をする事もならず、愼も出來ず、せん方なさに癢氣抑へたり、顔しかめたり、酒飲んで紛らしたり、さりとは氣の毒なものでござります。壺割つて仕舞うてからは、何いうても詮ない事ぢや。身代の壺を割らぬさき、御用心が第一でござります。(鳩翁道話)

二 談義僧

或山家より京の町へ談義僧を招待に參りました。折節その日は雨降で道もわるく、駕籠をもつて迎へに來ました。和尚もやがて用意をして、駕籠に打乗り、京を離れて三四里

鳩翁道話
柴田鳩翁の心學道
話をその子武修の
筆記した書。續篇の
續々篇合せて九
卷。

許と思ふ所で、どうした事か駕籠の底が抜けました。いたはしや、和尚は袈裟も衣も泥まぶれになられた。迎の人足も氣の毒がり、そこら駈廻つて、繩きれ多く拾つて來て、やうやうと駕籠をからげ、さて和尚に再び「お乗りなされ」といふ。和尚も氣味わるけれど、雨は強し、袈裟は汚れる、晝中にあるくも外聞悪く、不承々々駕籠に乗る時、これ駕籠の衆、もう底は抜けはすまいか。「いえ、氣づかひはござりませぬ」といふ故、乗移ると、鼻上げるとの拍子で、また底がめきくといふ。和尚大きに肝を潰し、これではなか、安心がならぬ。御苦勞ながら合羽の上から今一度、丈夫に繩がらみにして下され」といはれる。人足も尤もに思ひ、また繩ぎれを

拾ひ集め、合羽の上を豎横十文字にからげ、是であやまちはござるまい。」と、道を急いで或村を通りかゝつた。

折節此の村に法談があつたと見え、參詣の老若、道場の歸り足に此の駕籠を見つけて、肩衣をかけたる親仁かみじんが、傍の媪にいふには、「なんと皆の衆、今日の御勸化は有難い事ではござらぬか。いかさま無常迅速の世の中、生者必滅、會者定離のことわり、何時如來様のお迎があらうやら知れぬが人の身の上。あれ、あの駕籠を見さつしやれ。どうしても京へ奉公に行た人が死んだと見えて、死骸を在所へつれていぬると見える。さてもはかないものぢやござらぬか。」といふ聲を、駕籠に乗りたる和尚聞きつけ、さては我を死人と心得た

か。いま／＼しい。」と、わざと駕籠の中で咳ばらひすると、かの老人は此の咳ばらひに驚き、急に傍へ飛びのき、小聲になりて、「死人ぢやと思つたら、どうしても科人ぢやさうな。めつたに側へ寄るまいぞ。」といふ。和尚愈、腹を立て、今はたまりかねて、駕籠の中でちだんだ蹈み、大聲あげて、「科人ではおらない。」といふ。其の聲にまたびつくりして、さては科人ではなうて、どうしても氣ちがひぢやさうな。」といはれた。

是が面白い話ぢや。何分駕籠を外から繩がらみにしたもののゆゑ、誰に見せても死人ぢや。然るに中から物いへば「科人」といふもことわり、また「氣ちがひぢやさうな」といふのも、外からこじつけていふのではない。皆此の方に其の相

其の模様があるによつてぢや。これでよう御合點をなされませ。よいものをわるいとは人はいはぬ。何事も身を省みるのが肝心ぢや。或人の道歌に、

世の中は何もいはずに伊豫簾

その善し悪しは人に見えすく (續鳩翁道話)

二四 孔子とその徒

安藤 四 秀

水汲に出た子貢は、井戸端から目を放つた時や、離れた軒下の竈の傍に蹲つて、克明に燃え差しの木を片付けて居る顔淵の姿がふと目に留つた。

師を繼ぐ可き仁者として、皆の者から深い尊敬を拂はれ

安藤圓秀

愛知縣の人。前東京帝國大學助教

子貢

姓は端木、名は賜。子貢はその字。孔子の門人。

顔淵

姓は顔、名は回。字は子淵。孔子第一の高弟。

てゐる畏友が、鞠躬如として飯焚をしてゐるのを思ふと、子貢は旅の疲勞も忘れ果て、敬虔な心になつた。

「從者や若者達の困憊してゐるのを勞つて、自分から手を

下して飯を焚いてゐて

呉れるんだなあ。本當

に尊い人だ。日頃見る

と弱々しいやうだが、か

うして窮迫のどん底に

落ちると、本當の人格の光が輝いて來るんだな——あゝ勿

體ないことだ。」

彼は感謝の心に一杯になつて、顔淵の姿を見守つてゐた。



孔子

顔淵は薪の始末を終へると、竈に寄りそうて鍋の蓋を取り放つた。抑へられてゐた湯氣が棒のやうになつて舞ひ上つた。

一二分も経たぬうち、子貢は見てはならぬものを見たやうにぎくりとした。それは、鍋の中から一杓子の御飯をすくひ出しておいて蓋をした顔淵が、暫くためらつた後、杓子の飯を食べるのがはつきりと目に付いたからである。

子貢は全身に冷水を浴びたやうに感じた。名狀し難い錯雜した思が旋轉して、思はず足音を忍ばせて、急遽、井戸端から去つた。

*

*

*

「先生。」子貢は亢奮した面持で孔子の座へ近寄つた。

「先生に伺ひますが、どんな仁者でも愈窮迫して來ると、素地の野性が出て來るものでございませうか。」

「何を又。突拍子もない問ぢやのう。つい此の二三日前も其の事で其許としみぐ話したではないか。今更そんな解りきつた事を、なぜ問題にするのぢやな。」

「いえ、どうしても私に解せぬことがありますので——確かに仁者は道にはづれた振舞は致さぬ者でございませうな。」

「勿論のことぢや。それが有るやうでは仁者といふことは出來ぬ。」

居合はした弟子達は孔子と子貢との問答を不思議さうに聽いてゐた。子貢はその弟子達を氣にしながらも、

「先生、顔回さんなどは、どんなに窮しても、變節するやうなことは無いでせうか。」

「妙なことを尋ねるものぢやな。今度この災厄の中の様子でも解つてゐるではないか。飢と不安とに脅かされながら、泰然として道を樂んでゐる回の態度は、弟子ながらも實に立派なもの、俺は尊んでゐるのぢや。なか／＼あゝは出來ぬものぢや。今もこの人達と、其許や回のことを話してゐたところぢや。」

「先生。私はたつた今、情ないことを見せ付けられました。」

子貢の聲は急に沈痛な調子に變つた。

「ふむ。どうしたとな。」

「私はかういふことを先生の御耳に入れるのは、よくないことゝは思ひますが、如何にも友人の非を許くやうでありますから——然し餘り痛ましい事實なので、一通り申し上げた方がよいやうに存じます。」

そこで、子貢は今見たまゝの事實を、思ひ切つて孔子に話したのである。

「それは何か其許の思ひ違ひではないか。」

「いゝえ、事實私がぬすみ食ひするところを見てゐたんですもの。」

「ぬすみ食——随分さもしい言葉ぢやのう。」孔子は顔をしかめて子貢を見詰めた。

「え、さもしいことです。何といふ醜い、痛ましいこととせう。」

「しかし、賜や、其許がそれ程はつきり言うて居るにも拘はらず、俺はどうしても回を疑ふ氣になれぬ。回に限つて其のやうな卑しいことのあらう道理がない。」

「しかし、先生。事實が證明してゐます。」

「いや、これには何か仔細があらう。まあお待ち。俺が訊いて見よう。」

躍起になる子貢を押靜めて、孔子は顔淵を呼んだ。

やがて顔淵は若者と連れ立つて靜かに這入つて來た。白けたやうな一座の様子にやゝ不審を懷きながら。

「先生。何か御用でござりますか。」

「今日は其許は飯焚ださうぢやな。御苦勞、御苦勞。」

「いゝえ、子貢さんの御蔭で皆々大喜びでござります。御飯の出來ますのを大變待遠うさうに致して……、もう間もなく御食事が調ひます。」

「ははは……、久し振りの御飯ぢやからのう——實はの、俺は昨晚、死なれた母親の夢をありくと見ましたのぢや。俺達が斯うした羽目になつてゐるから、何か蔭ながら助けてゐて下さることかと思つて、今朝から大變お懐かしく思

つてゐるのちや。御飯が出来たら御供養にお初穂を差上げたと思ふから、少しお供へをしてお呉れぬか。」

「あ、さやうでしたか。それはつい不調法なことを致しま



淵 顔

した。實は先程餘り急いで焚いたものですから、出来工合が如何であらうかと思つて、鍋の蓋を取つて見ました時、どうしたはず

みでしたか、軒から煤の塊が鍋の中へ落ちこみました。早速煤の附いた處だけ、杓子ですくひ上げましたが、汚れたものを神様へのお初穂にも恐れ多いし、それかと申して、た

ひ一粒でも、子貢さんのお情の籠つたものを棄て、しまふのは勿體ないし、煤を取去つて——鼠色になつてゐましたが、私が戴いてしまひました。そんな譯でございますから、もうお初穂に差上げることは出来まいと存じます。」

「お、さやうか、さやうか。何、それでは此の次に炊いた時で宜しい。——皆も嘸かし待つて居ることぢやらう。早く食べられるやうに世話してやつてお呉れ。俺も一所に戴きませう。」

「私の不行届から本當に残念なことを致しました。では御支度を致します。」

顔淵は一禮して靜かに出て行つた。孔子は一座を見流

して、微笑しながら、

「賜や、どうぢや。」

「まことに恐れ入りました。」

「俺はどこまでも回を信じてゐる、俺の信賴は決して裏切られることはないと思ふ——のう賜や、俺は却つて其許の疑ふ心をあさましく思ふのぢや。だが決して其許ばかりを責めようとは思はぬ。お互に道に因つて結び付けられてゐる俺達が、如何ほど飢に苦しまうと、僅か一杓子の飯を中心にして、互にあさましい疑を抱かねばならぬことを悲しく思ふのぢや。」

孔子は忍び難い暗然たる思にとざされて、堅く口を噤んだ。
「誠に——まことに何とも申譯がありません。」

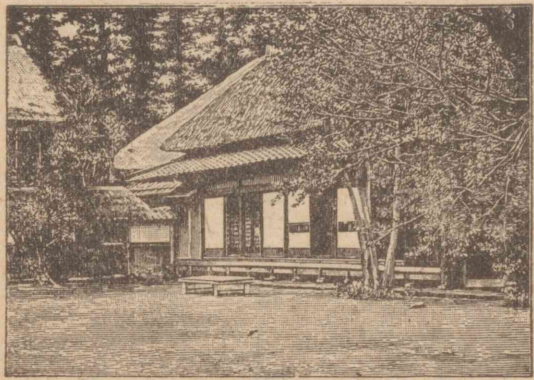
身の措き處もないやうに恥入つた子貢は、其の場にひれ伏して暫くは身動きもし得なかつた。（孔子とその徒）

二五 春は動く

長塚節

長塚節
茨城縣の人。文學者。大正四年歿、年三十七。

春は空からも土からも、かすかに動く。毎日のやうに、西から埃を卷いて來る「はやて」が、どうかすると、はたと止まつて、空際には、ふはくした綿のやうな白い雲が、ほつかりと暖い日光を浴びようとして、僅かに立ちのぼつたといふやうに、動きもしないでじつとして居ることがある。水に近



長家の節の家

い湿つた土が、暖い日光を思ふ一杯に吸うて其の勢づいた土の微かな刺戟を根に感ぜしめるので、田圃の榛の木のみな蕾は、目に立たぬ間に少しづつ延びて、ひらくと動き易くなる。其の刺戟から、蛙はまだ蟄居の状態に在りながら、稀にはそつちでもこつちでも、くくくと鳴き出すことがある。空から射す日の光はそろそろと熱度を増して、土はそれを幾らでも吸うて止まぬ。土はすべてを段々と刺戟して、堀のほとりには、蘆や、芝や、其の他の草が

空と相映じて、すつきりと其の首を擡げる。軟かさに満たされた空気を更に鈍くする様に、榛の木の花はひらくと止まず動きながら、煤のやうな花粉を撒き散らして居る。蛙は假死の状態から離れて、軟かな草の上に手を突いては、驚いたやうな様子をして、空を仰いで見る。さうして彼等は慌てたやうに聲を放つて、其の長い睡眠から復活したことを空に向つて告げる。それで遠くから聞く時は、彼等の騒がしい聲は、只空にのみ響いて快げである。彼等は更に、春の到つた事を一切の生物に向つて促す草や木が心づいて、其の活力を十分に發揮するのを見ない中は、鳴く事を止めまいと努める。田圃の榛の木はとうに

花を捨て、自分が先に、嫩葉の姿になつて見せる。その黄色味を含んだ嫩葉が、爽かて且つ朗かな朝日を浴びて、快い光を保ちながら、蒼い空の下にまたたゆたうて居る周囲の林を見る。岬の様な形に偃うて居る水田を抱へて、周囲の林は漸く其の本性のまに、勝手に白つぼいのや赤つぼいのや、黄色つぼいのや種々に茂つて、それが氣がついた時に、急いで一つの深い緑になるのである。雑木林のそこらこゝらに散在して居る開墾地の麥も、すつと首を出して、蠶豆の花も可憐な黒い瞳を聚めて、羞かしさうに葉の間から、こつそり四方を覗く。雑木林の間には、又芒の硬直な葉が空を刺さうとして立つ。其の麥や芒の下に居を求める雲

雀が、時々空を占めて、「春がふけた」と呼びかける。さうすると、其の同族の聲のみが空間を支配して居るべき筈だと思つて居る蛙は、其の轉る聲を壓し去らうとして、互の身體を飛越え、鳴きたてるので、小勢な雲雀はすつとおりて、麥や芒の根に潜んでしまふ。さうしては蛙の鳴かぬ日中のみ、これを仰げば眩ゆさに堪へぬやうに、其の身を遙かに煌めく日の光の中に没して、其の小さな喉のちぎれるまでは、劇しく鳴らさうとするのである。蛙は愈益、鳴きほこつて、檜の木のやうな大きな常磐木の古葉をも、一時にからりと落さねば止まないとする。

此の時、すべての樹木や、それから冬季の間には、ぐつたり

と地に附いて居たすべての雑草が爪立して、たゞ空へくと暖かな光を求めて止まぬ。土がそれをじつと引留めて放さない。それで一切の草木は、土と直角の度を保つてゐる。冬季の間は土と平行することを好んで居た人も、鐵の

筆蹟
麥の葉は天つひば
りの聲ひゞきひと
はひとには揺りも
てのぶらし節

麥の葉は天つひばりの聲ひゞきひとはひとには揺りもてのぶらし節

針が磁石に吸はれる如く、土に直立して、てんでに手に農具を執る。紺の股引を藁で括つて、皆田を耕し始める。水が欲しいと人が思ふ時、蛙は一齊に、裂けるかと思ふほど喉の袋を膨脹させて、身を撼がしながら殊更に鳴きたてる。白

い蛙絲のやうな雨は、水が田に満つるまでは注いでまた注ぐ。鳴くべきときに鳴く爲にのみ生れて來た蛙は、刈株を引返し、働いて居る人々の周圍から足下から逼つて、敏捷に其の手を動かせくと促して止まぬ。蛙がびつたりと聲を呑むときには、日中の暖かさに人もぐつたりとなつて、田圃の短い草にころりと横になる。更にひつそりと靜かな夜になると、蛙は如何に自分の聲が遠く且遙かに響くかを誇るものゝ如く、力を極めて鳴く。雨戸を閉づる時、蛙の聲はめつきり遠く距つて、それがぐつたりと疲れた耳をくすぐつて、百姓の總てを安らかな眠に誘ふのである。熟睡する事によつて、百姓は皆短い時間に肉體の消耗を恢復

する。彼等が雨戸の隙間から通す夜明の白い光に驚いて、蒲團を蹴つて外に出ると、今更のやうに耳に迫る蛙の聲に、其の覺醒を促されて、井戸端の冷たい水に、全く朝の元氣を呼返すのである。草木は、遠く遙かに響けと鳴く其の聲にゆられつゝ、夜の間には生長する。櫟や、檜や、其の他の雜木は、蛙が鳴けば鳴く程、さうしてそれが鳴きやむ季節迄は、幾らでも繁茂する事を繼續しようとする。そこには、毛蟲や其の他の淺ましい損害が、或は有るにしても、しとくと屢、梢を打つ雨が、空の蒼さを移したかと思ふやうに、力強い深い緑が地上を掩うて、爽かな涼しい陰をつくるのである。(土

二六 土の歡喜

河井 醉 茗

河井醉茗
堺市の人。名は又
平、詩人。

これがどうして消えるだらうと思はれた雪が
 いつの間にか音もなく
 大地の彼方に消えて行つた
 あんなにひしくと
 きびしく築いた霜柱も
 何處へか持つて行かれた
 白くからくゝに乾いてゐた街道も
 茶色にうつぶしてゐた原野も
 氣がゆるんだやうに

ゆるやかに胸をくつろげて

その間から

絹絲のやうな草や木の芽が

長い間こらへてゐた息をホツと吐く

やがてはのびくとした土の歡喜が

太陽に向つて

地上一面に

あをくくと舞ひあがるであらう (醉茗詩集)

南洲
西郷隆盛

二七 南洲遺訓

事大小となく、正道を履み至誠を推し、一事の詐謀を用ふ

べからず。人多くは事の差支ふる時に臨み、策略を用ひて

一旦その差支を通せば、後は事宜次第工夫の出来るやうに

思へども、策略の煩ひ屹度生じ、事

必ず敗るゝものぞ。正道を以て

之を行へば、目前には迂遠なる様

なれども、先に行けば成功は早き

ものなり。身を修むるに克己を

以て終始せよ。總じて人は己に



西郷隆盛

克つを以て成り、自ら愛するを以て敗るゝものぞ。よく古今の人物を見よ。事業を創起する人、大抵十に七八までは能く成し得れども、残り二つの終まで成し得る人は稀なり。

始はよく己を慎み事をも敬する故、功も立ち名も顯るゝなり。功立ち名顯るゝに隨ひ、いつしか自ら愛する心起り、恐懼、戒慎の意弛み、驕矜の氣漸く長じ、その成し得たる事業を負み、終に敗るゝものにて、皆自ら招くなり。故に己に克ちて睹ず聞かざる所に戒慎すべきものなり。人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして己を盡し、人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし。過を改むるに、自ら過てりとだに思ひつかば、それにて善し。その事をば棄てゝ顧みず、直ちに一步踏出すべし。過を悔しく思ひ取繕はんとて心配するは、譬へば茶碗をわり、その缺を集めて合せ見るが如く、詮もなきことなり。

命もいらす名もいらす、官位も金もいらぬ人は、始末に困るものなり。この始末に困る人ならでは、艱難を共にして國家の大事は成し得られぬなり。

道を行ふ者は天下舉つて毀るも足らずとせず、天下舉つて譽むるも足れりとせず。自ら信ずること厚きが故なり。天下後世までも、信仰悅服せらるゝものは、唯これ一箇の誠なり。古より父の仇を討ちし人、その數擧げて數へ難きの中に、獨り曾我兄弟のみ今に至りて兒童、婦女子までも知らざる者のあらざるは、衆に秀でて誠の篤きが故なり。誠ならずして譽めらるゝは、僥倖の譽なり。誠篤ければ、たとひ當時知る人なくとも、後世必ず知己あるものなり。

曾我兄弟

兄は十郎祐成、弟は五郎時致。建久四年（八五三）父の仇を討つ。

今の人才識あれば事業は心次第に成さるゝものと思へども、才に任せて爲す事は、危くして見て居られぬものぞ。體ありてこそ用は行はるゝなれ。

國語讀本卷四終

昭和十二年八月十九日印刷
昭和十二年八月二十三日發行
昭和十三年二月十七日訂正再版印刷
昭和十三年二月二十一日訂正再版發行

國語讀本改訂新版

(各卷 定價金六十錢)

編者	上田萬年
同	榮田猛猪
同	鹽野新次郎
發行兼印刷者	株式會社 成社
右代表者	布津純一
印刷所	日進舎印刷所



發行所

東京市麴町區丸ノ内三丁目六番地
株式會社 成社

電話九ノ内(23)二六八六番
振替東京一二〇五五番

